
組曲 ~ 移し身の双子 ~

マオ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

組曲〜移し身の双子〜

【Nコード】

N7378C

【作者名】

マオ

【あらすじ】

「要らないところを頂戴」不思議な双子に出会う人々。それぞれの願いと欲望とが入り混じり、己の一部と引き換えに得るものはなんなのか。失うものはなんなのか。

序・晴れた日々小奏鳴曲（ソナチネ）

春。

天気の良い日だった。

可愛らしい二人が仲良く手を繋いで歩いている。

公園のベンチに座ってぼんやりとしていた私の視界に映った二人の少女。

中学生、いや、高校生くらいだろうか。

同じ顔をしていた。双子なのだろうかと予想できた。

同じ服を着ていた。どこかの制服だろうか。タイの着いた丈の短い上着に、スカート。あまり派手な印象ではない。いまどきの子供などと称してテレビで映すような大胆な格好ではなかった。見てみると靴まで一緒である。やはりどこかの学校指定の制服なのだろう。

同じ髪形をしていた。肩まではずかには届かない、日の光に緑にも見える髪。

同じ瞳をしていた。日の光に青く映る不思議な瞳。

日本人ではありえないような髪と目の色だが、今は染めているものもいるし、カラーコンタクトというものもある。真面目そうな少女たちに見えるが、平日の真昼間に公園を歩いている辺り、見た目の印象と中身は違うところか。

どこを見ても違いなど見当たらないような少女二人。

陳腐な表現だが、まるで鏡に映したかのように、彼女たちは同じ顔と姿を為している。

あれでは親でも見分けが付かないのではないだろうか。

固く固く手を繋いで、彼女たちは歩いている。決して手を離さないというように。

その少女たちを見たのは偶然だ。なんとなく目がいったどこへ行くのだろうかと思った。

平日の昼間に、制服らしき格好のまま公園を歩いている双子の姉妹。

このままでは補導されるのではないだろうか。
ぼんやりとそう思った。

が、私は他人だ。少女たちの身内でもなければ保護者でもない。心配など余計な世話だろう。とは言っても、良識のある大人であれば学校に行きなさいと注意するところではある。

そう思ってはみるものの、最近の世情の様子を見る限りでは、まともな注意をただけで割に合わない報復をされることがあるので、他人にはあまり声をかけないほうがよいような気がする。

心配して声をかけただけで痴漢や変質者扱いされてはたまらない。特に春先は変な人間が多発するといわれている季節でもあるので、なおさら変態扱いされる可能性が高いような気がする。

私は日和見を決め込んだ。

どうせ他人だ。それに学校をサボってのうのうとこんなところを歩いているような少女は、一度補導でもされたほうがいいのかもされない。

それで懲りてサボらなくなるかもしれない。

私がそんなことを考えている間に、双子の少女は公園に入ってきた女性を見ている。

どこか生氣のない女性だった。身体は大きく、かなりのぽっちゃり感の 要は太っているということなのだが 女性。

元気のない様子で公園に入ってきて、私の向かい側にあるベンチに座った。

大人が優に三人は座れるベンチなのに、女性が座ると満席状態に見えた。

その女性に興味でもあるのか、双子は近付いていく。

片方の子は笑っていた。

片方の子は無表情だった。

同じ顔でも心はやはり違うようだ。

同じ姿の、違う人間。

彼女たちは何事かを女性に話しかけている。

片方の子は笑顔で。

片方の子は無表情で。

「 ようだい」

「 だけでいいの」

途切れ途切れに、双子の声が私にも聞こえる。向かい側のベンチとはそれなりに距離があるが、障害物がないので声は通る。

「頂戴^{ちやうたい}」

一言が明確に聞こえた。

もしやあの子らは女性に金品でもせびっているのだろうか。そうだとしたら大人の私は警察を呼ぶなり双子を止めるなりしなくてはならないだろう。

「要らないところでいいの」

にこやかに、片方の少女がいう。

要らないところ……？ どういう意味だろう。私はさりげなく耳を濟ませた。

「要らないのなら、頂戴」

無表情に、片方の少女がいう。

何をくれと言っているのか。女性は不思議そうに双子を見て、

「そんなものでいいの……？」

おそろおそろの問いかける。その様子には希望のかけらのようなものが見受けられた。

先ほどまで生気がないと思っていた女性に、少しずつ何かに戻ってきているような。

何かに疲れきった人が^{すが}縋るものを見つけたかのような、そんな表情になる女性。

双子は笑いながら。

双子は無表情のまま。

「お礼はするよ」

「だから頂戴」

「貴女の望むものをあげる」

「だから頂戴」

交互にそう行つた。女性は眉を寄せ、考え込んでいるようだった。一体何を頂戴と言っているのだらう？お礼をすると言っている双子。

望むものをあげると。

なんのことやら。私は意識を女性たちから逸らした。

見ている意味がない。そう思った。

「要らない部分でいいの」

「貴女の要らないところを頂戴」

「……あげるわ」

女性の声が聞こえた。視線をやらすとも音は勝手に耳に入ってくる。

「どい？」

「どこをくれるの？」

双子は女性に話しかけている。

「あたしの要らない部分は、このぶさいくな鼻。つぶれて醜いこの鼻をあげる。それであたしの願いがかなうならね」

「いいわ」

「頂戴」

にこやかに、無表情に、手を繋ぎあつたままの双子は頷いた。

「そのかわり、あたしの望みはかなうのよね？ このぶつさいくな鼻のかわりに」

ヤケになつていているらしい女性は、鼻を鳴らして言い捨てる。信じてはいないのが明らかだった。まあ、当然の反応だらう。変わった子供の言い分に付き合うだけ、この女性は人が好い。私はそう思い、再び視線を向けた。他にやることを思いつかなかったのだ。

「そうよ」

「かなうわ」

にこやかに笑うほうが女性に手を伸ばした。女性の要らないと言った部分をそつと撫でる。

「頂戴、ね」

くすくすとあとけなく笑う顔に、女性がひきつった。本当に鼻をちぎられると考えたのか。

あんなに小さく細い手にそんな力があるわけがないのに。

私は内心で小さく笑った。

少女はそれ以上何もせずに手を離したからだ。

「約束、したから」

無表情のほう告げて、双子はそのまま歩いていく。もう女性には興味がないとでもいうような態度だ。ベンチに座っていた女性が大きく息を吐く。

お人好しな返事をしたせいで、恐い思いをしたようだ。

あんなに華奢な少女たちに人の鼻をちぎるようなことが出来るわけがないだろうに。

女性もそれに思い当たったのか苦笑を浮かべている。本気にするなど馬鹿げたことだと分かったのだろう。

彼女はそのまま立ち上がり、公園の外へ出て行った。

私は見送り、ベンチを立った。

煮詰まった気分をなんとかしたくて公園に来てみたものの、日向ぼっこをしていただけのような気がする。

戻って仕事をしなれば。

重い足を引きずるようにして公園を出たとき、悲鳴が聞こえた。

走っていく人たち。

何があったのだろう。野次馬根性で私は人の流れにまぎれて歩いた。あいにくと人が多すぎて目で見るところまでは行けなかった。

周りの人の言葉から、何かの事故が起こったくらいは見当がついた。

救急車のサイレン。赤く回転する光が近付いてくる。

ケガ人がいるらしい。

組曲～移し身の双子～

大変だな。
他人事そのものと思い、私はその場を後にした。

組曲～移し身の双子～

序・晴れた日々小奏鳴曲（ソナチネ）（後書き）

こりずに長編です。よろしければ完結までお付き合いください。

壱・ピアノフォルテく叙情詩（アリア）・1

ピン！

甲高い音がひとつ、音楽室に満ちる。

大きなグランドピアノ。その前の椅子に座るのは少女だ。やぼったい制服の胸元のネームは橋たかはなとある。彼女の名前は橋聡子はしこうこといった。

ピン！

また、高い音。

少女の指がピアノの鍵盤をたたく。何か曲を奏でるわけでもない。ただ、弾くように強く鍵盤を押しているだけだ。

彼女の頭の中には、こだまする声。

ピン！

『辞めてしまいなさい、いつまで経っても上手くならないんだから』

『どうして分からないの？ お母さんはあなたのためを思っているのよ』

甲高い声が、少女の中にこだましている。

ピン！

同じ音を何度も何度も彼女は繰り返す。頭の中の声を振り払うように、何度も。

ピン！

辞めたくない。続けたい。

彼女には夢があった。どうしてもかなえない夢があった。願うことがあった。貫きたいことがあった。

プロのピアニストになって、世界的なオーケストラに加わりたいという、夢があった。

でも。

『才能なんか一握りの人にしかないのよ。聡子、あなたにはピアノの才能なんてないの。趣味くらいにしておくのよ。分かりなさい。』

ほかのことを探せば良いじゃないの!』

母親は認めてくれなかった。

ピン!

聡子の家にはピアノはない。小さな中古のエレクトーンがあるだけで、ピアノはなかった。本物に触っていないと腕が落ちるとピアノの先生は言い、聡子は両親にねだったが、ごく普通のマンション暮らしの家庭にピアノを買う余裕はなく、結局学校の音楽室のピアノに毎日触らせてもらうしかなかった。ピアノに触りたくて音楽担当の先生に頼み込んで、何とか放課後に触らせてもらえることになったときはとても嬉しかった。

飽きずに弾いていた。雨の日も風の日も台風の日も、ずっとずっと弾いていた。

弾けば弾くほど上手くなるものだと思っていた。

でも。

ピン!

ある日、転校してきた彼女に出会った。彼女は小さい頃からピアノを習っていて、専門の教師までついているような天才的な腕前の少女だった。

幼い頃からずっとピアノに触っているという彼女は、聡子よりもずっと上手だった。

聡子がピアノに触ったのは中学に入ってからだ。まだ二年に満たない。楽譜も読めなかった頃から考えたら凄い進歩だと自分では思っていたけれど。

全然足りなかったと、彼女の演奏を見て思い知った。何か行事があることに彼女はピアノ演奏に借り出された。どこの誰が聞いても感心するような腕前だった。

聡子とは違う。彼女は音楽系専門の高校への進学がすでに決まっている。もう少ししたら三ヶ月の短期留学に出るとも言っていた。彼女はプロのピアニストになることがすでに決まっているのだろう。小さい頃から、決定しているのだ。

聡子とは、違う。

ピン！

ピアニストになりたいと思ったきっかけは、テレビで見たオーケストラの放送だった。

ピン！

小さなテレビ越しで、本物の音ではないけれど、それでも感動したから、あんなふうになりたいと思った。

一心不乱に音の洪水に酔いしれた。きつと本物の音はもっと凄いと思った。一度でいいから聞いてみたいと親にねだったけれども、オーケストラのチケットは中学生の聡子にはそう簡単に手が出ないくらいの金額で、お年玉を貯めて連れて行ってもらう約束はしたけれど、親には連れて行く気がないようだった。

彼女の演奏を聞いてしまったからだ。

聡子が行っているピアノ教室の発表会に、彼女が呼ばれたことが、そもそもの発端だった。

彼女は練習生ではなく、招待客だった。練習生が発表を終えた後、招待されていた彼女が演奏した。

明らかにほかの子供とは違う、音。

同じ楽器を使っている、これほど差が出るのかと思うような、圧倒的な音。

技術の差は歴然としていた。

年は同じ。体格も似ている。

でも、ピアノに触っていた時間が違う。才能が違う。何もかもが違う。

彼女の演奏を聞いて、きつと誰もがそう思っただろう。

彼女は天才だ。まごうことなく天才だ。

遅かった。聡子は思った。

自分に才能がないのではなく、彼女よりピアノに触れるのが遅か

ったから、ここまで差がついているのだと。

『あの子、すごいわねえ』

見に来ていた母親がうつとりと呟くのを聞いていた。聡子の演奏などうるさいとしか思っていなかった母親が、彼女の演奏にはうつとりと聞き入っている。

でも母親を責めることはできなかった。聡子もまた彼女の演奏に聞き入っていたからだ。

ピン！

それから母親の態度は一変した。

『辞めなさい。聡子には才能がないわ』

月謝を払うのがイヤなのだろうか。いつまで経っても進歩が見られないように思える我が娘と、天才的な腕前の彼女を比べてしまったのだ。

比べていいわけがない。彼女と聡子とではピアノにかけた時間が違う。

同じくらいの時間をかければ、聡子だって彼女と同じくらいに上手になれる。

そのはずなのに、母親は辞めろといった。

父親も辞めたほうがいいんじゃないかと言い出した。

『うちはマンシヨンだ。楽器の音がうるさいと言われたらどうする？』

ヘッドホンをして弾いているといっても、聞いてはもらえなかった。

鍵盤を押す音がうるさいというのだから、聡子にはどうしようもない。曲を奏でることすら、許されないのだ。

ピン。

へにやりと、指が曲がった。

辞めたくないのに。

認めてもらえない。

才能がないなんてどうして分かるの。音感がないなんてどうして

言えるの。

がんばれば何とかなるかもしれないのに。

あたしはがんばっているのに、誰もそれを認めてくれない。

ほかのことを探せと言われたけど、どうしてこれじゃダメなんだろう。

がんばっているのに。

あたしのこれは、努力じゃないの？

聡子はゆっくりと鍵盤を叩き始めた。

二年近く習ったことで指は滑らかに動くようになったと思う。そりや彼女に比べたら大人と子供くらいの差にはなる。

でも、二年でここまで上手くなったのは、間違いなく聡子の努力だ。

最初の頃には重たかった鍵盤も、指や腕に力がついた今では重く感じない。

弾くのは楽しい。弾くのは嬉しい。

上手になっていいると思ったらとても幸せな気分になったのに。

どうしてもダメなんだろう。

なんでなのかな。あたし一生懸命がんばっているのに。

辞めたくない。

『今月いっぱい、辞めなさい』

でも決められてしまった。辞めなきゃならなくなってしまった。

聡子の意思は無視して、親が決めてしまった。聡子がピアノを習いたいと言いつ出したときにはあれほど喜んでいた母親が、真っ先に聡子の才能を否定した。

悔しい。

あの時彼女の演奏を聞かなければ、母親の態度は変わらなかったかもしれない。もっと聡子が早くピアノを始めていれば、また違った意見だったかもしれない。

でも、もう遅い。

Bannon!!

聡子はたたきつけるようにして演奏を終わらせた。来月の発表会の課題曲を練習する必要はなくなってしまうた。

今月いっぱい聡子は辞めてしまふのだから。

暗い瞳で楽譜を眺める。たくさん練習したのに、もう出来ない。

エレクトーンも捨ててしまふと父親は言ったのだ。ピアノに触るチャンスは放課後だけ。

それもこれからは無理だろう。受験に向けて塾に行かなくてはならなくなった。ピアノにばかり情熱を向けていた聡子の学業成績は、はつきり言って良くない。

両親はそれを心配して勝手に塾を決めてしまった。

ピアノを辞めて浮いた分の月謝を数学塾に回したらしい。

部活も辞めろと言われた。成績が悪いのだから勉強しなさいと。夢をかなえることは出来なくなった。

聡子は息をついて楽譜を撫でた。これだけは捨てないでおこう。時間が出来たらなるべくピアノに触りに来よう。

今は無理でも、大人になってから何とかなるかもしれない。

今は無理でも、親元を離れたら夢をかなえるチャンスが来るかもしれない。

あきらめたくないから。

泣き出しそうな顔で聡子は楽譜を撫でて、それからピアノのふたを下ろした。

「要らないところはない？」

声がしたのはそのときだった。

壱・ピアノフォルテく叙情詩（アリア）・2

ビックリして振り返る。聡子しかいなかったはずの音楽室の中に、いつの間に入ってきたのか同じ顔をした女の子が二人、立っている。見たこともない制服を着ていた。高校生くらいに見える少女たちは、仲良く手を繋ぎあっている。

「だ、誰？ どこから入ったの？」

驚きあわてて聡子は二人を見る。最近多い変質者の不法侵入だろうか。それにしても女の子二人と言うのはちょっと変な気がする。

「先生に見つかったら大変だよ。早く出てったほうがいいよ」

少し身を引きながら聡子は二人に語りかけた。同じ顔の二人は、一人は笑顔で、もう一人は無表情に聡子を見ている。

「わたし、音亜ねあ」

にこやかにひとりが自己紹介する。

「こっちは優亜ゆあ。おねえちゃんなの」

無表情の少女が、軽く首をかしげた。挨拶のつもりのようなのだ。

「だ、だからなに」

いきなり自己紹介されても困ると聡子は眉を寄せる。やっぱり変な人なのだろうか、この二人。

「……要らないところはない？」

無表情に、無感情に思える声で優亜と名乗った少女が聡子に聞いてくる。

「い、要らないところ？ なにそれ」

この人たちヘンだ。聡子は痛感した。先生を呼んだほうがいいかもしれない。音楽室の鍵は預かってしまっていて、音楽室担当の先生は職員室にいるはずだ。すでに放課後で、部活も終わる時間。周りに人の気配は薄い。

職員室は音楽室と離れている。大声を上げて聞こえる距離とはちよっと思えない。だからこそ思う存分演奏できるのだが。

それがアダになったと聡子は痛感している。

逃げられるだろうか。足の速さに自信などない。自慢じゃないが運動は大嫌いだ。百メートル走での記録タイムなど自分で泣きたくなるくらい遅い。

双子らしい同じ顔の少女たちに凶器を持っているような感じはないが、昨今いろいろと物騒な時代だ。どんな人物が何をしでかすか分かったものじゃない。

聡子は楽譜を抱えて二歩ほど後退した。音楽室の出入り口までは聡子の足であと十歩ほど。

一瞬で駆け抜けるくらいの足の速さが欲しいと心底から思ったが、無茶である。

「貴女の身体で、要らないところはない？」
にこやかに音亜が話しかけてくる。

「は？ か、身体？」

聡子はひきつり、訊き返した。

身体。要らないところ。どういう意味がよく分からないけれど、やっぱり変態だ。そうに違いない。

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」
「あなたの望むものをあげるよ。だから頂戴」

望むもの。逃げようとしていた聡子はその単語に反応した。

望み。

「出来るわけないよ」

怯えが去ったわけではないが、聡子はドアのほうに向けていた顔を双子に向けた。

かなうわけがない。聡子の希望はすでに絶たれている。

ピアノを続けたいけれど、すでに周りがそれを許してくれない状況だ。

現実にピアノ教室には母親がすでに辞めることを通告してしまっている。

聡子にはどうしようもなく、ほかの誰にもどうしようもないこと

だ。

今は無理。どうあがいても無理。

それを覆すことなどこの双子に出来るわけがない。

聡子は息をついて双子に言った。

「ピアノが続けられてプロのピアニストになれるのなら身体のどこだつてあげるけどさ。そんなの無理でしょ。大体どうやって身体をあげればいいわけ？」

そこまで言うてからゾツとした。頂戴と言うことは、あげると言つたらこの双子は何をするのだろう？ どうやって要らないと言つたところをもつて行くつもりなのだろう？

そもそも、要らない部分でいいとはどういうことなのか。

「まさか、切り刻むとかする……？ 殺人犯？」

聡子の怯えに音亜は笑っている。邪気などないような笑顔で。

「殺人なんてしないよ。わたしたちは切り刻んだりもしないよ。だから要らないところを頂戴というの。要らないところなら、あとで文句も言わないでしょ？ 『要らないところ』なんだから」

「ち、ちよつと待ってよ。だから、どういう手段で身体を持っていくつて言うわけ？」

「いろいろ……」

優亜がつぶやく。

その声を聞いて、やっぱり逃げようと聡子は思った。この二人、絶対におかしい。

振り返つてドアまで走る彼女に、双子のどちらかが声をかけてきた。

「ねえ、考えておいてね？ 要らないところがあるかどうか……」

ボタンッ！ 勢いよく閉まるドア。鍵をかけることも忘れて走っていく音がする。

組曲～移し身の双子～

「恐がることないのにな」

「要らないところでもいいって言っているのにな」

まるきり同じ少女の声が音楽室にこだまする。

「考えてくれるかな」

「考えてくれるよ」

どちらの声なのか。優亜なのか、音亜なのか。

「だって、あの子は望みを捨てられないもの……」

壱・ピアノフォルテく叙情詩（アリア）・3

自分の教室まで戻って、聡子は息をついた。胸に抱いていた楽譜は折れ曲がってしまっている。強く握っていた音楽室の鍵に、ドアの鍵をかけるのを忘れていたことに気がついた。変な双子から逃げることしか考えていなかったのだ。もう一度戻って鍵をかけてくるべきだろう。が、一人で戻るのは恐い。変な人がいることを伝えて先生に行ってもらったほうがいい。

あの人たち、どこから入ってきたんだろ。最近変な事件多いし、恐いなあ。正直にそう思った。変質者が多くなってきたので、登下校の際には気をつけるようにと言われていたが、校内に入っ てこられると気をつけようがない。

自分の机に戻って鞆に楽譜をしまい、上着を着て教室を出る。もう帰ろうとしか思わなかった。職員室に入って、変な人が音楽室にいますと伝えると大騒ぎになった。先生が数人で音楽室に確認に行ったほどだ。

事情を聞きたいのもう少し残っていてくれと担任に言われ、聡子はしぶしぶ職員室のソファに座って待った。

どんな人だったと訊かれ、女の子二人でしたと答える。

「高校生くらいの、双子っぽい女の子ふたりでした」

うりふたつの顔、声、服。喋って感情を浮かべて初めて違いが分かるくらい似ていた。

高校生の女の子、と担任は驚いたようだった。しかし、昨今高校生でも事件を起こす時代だ。年代はあまり関係ないだろう。

「あ、制服みたいなの着てましたよ。このへんでは見たことない服だったけど……」

青緑を基調とした上着と、上着より薄い色のスカートに、紺色に近い色のタイ。黒のハイソックス。靴までは覚えていないが、全体的に受けた印象が制服のようだった。

そこまで説明したとき、確認に行った先生たちが戻ってきた。

本当に変な人がいたのかと聡子に確認してきたことから、あの双子はもう逃げてしまったのだと聡子にも知れた。

「いましたよ。なんか身体の要らないところ頂戴とか変なこと言われて、あたし恐くなって逃げてきたんですもん」

答えてから聡子はゾツとして自分の身体を抱きしめた。あげると答えていたら自分はどうなっていたのだろうか？

「誰もいなかったんですか」

怯える聡子に先生たちはなだめるように笑いかけていなかったよと答えた。

とにかく、しばらく音楽室で一人にはならないようにと。

できれば登下校も一人でしないほうがいいと言われ、聡子は困惑した。登校時には近所の友達と一緒に来ているが、ピアノ教室がない今日のような日は、残って音楽室でピアノを弾いているので下校は大抵一人だ。たまに友達も残って面白がって一緒にピアノを弾くことがあったが、今日は一人である。

日は暮れかけている。防犯ベルも携帯も持っていない。親に迎えに来てもらうにも、どちらも仕事だ。さすがに娘に変質者が声をかけてきたと知ったら、迎えにくらい来るだろうとは思うが、ピアノを辞めさせたいと無理矢理実行した両親の顔はあまり見たくなかった。ピアノをいじっていた音楽室で変な人に会ったなどと言えば、そら見たことか、辞めるべきなんだと言いかねない。

ケンカしているわけではない。でも、見たくない。

「大丈夫です、一人で帰ります」

聡子は強情に言い張った。親を呼ぶのはイヤだ。

先生たちは困惑している。変質者に会ったという生徒を一人で帰すわけにはいかない。このまま帰してもしものことがあったら。

担任が送っていくと申し出てくれた。ただ、もう少ししたら職員会議が始まるので、会議が終わるまで待っている必要がある。

どのくらいかかるのか分からない会議だ。それを待っているのは

退屈だろう。先生方は退屈ならいくらでもプリントを提供するぞと笑っている。ここは職員室で、数学やら国語やらその他教科の地獄のような問題が書かれたプリントがどっさり置いてある。

宿題を出されるより嫌な環境にいることに気がついた聡子である。これはなんとしてでも今すぐ帰らないと、会議が終わるまで地獄のプリントをやらされるハメになりかねない。

「ぜったいイヤです。一人で帰ります」

断固として言い張る彼女に、

「どうしたんですか？」

不思議そうな声がかかった。聡子は目を丸くする。まだ帰っていないのか。

彼女だ。聡子の憧れる腕前を持つ同級生。どうして職員室になんているのか。

彼女は校長室から出てきたようだった。何の話をしていたのかは聡子には見当がつかない。

「あ、橘さん。どうしたのー？ 顔色青いよ。具合悪いの？」

「う、ううん。ちょっと変な人に会ったの」

「えっ」

彼女は目を丸くした。先生たちが補足する。音楽室で変な女の子二人に会ったらしいと。

だから一人で帰るのは危ないと言っていたところなんだと。

「じゃあ、わたしと一緒に帰ろう！」

彼女は胸を張った。

「大丈夫！ わたし防犯ベル持つてるし！ けっこう力あるから！

橘さん守ってあげる！」

ちよつと待てと先生たちはあわてている。なんせ彼女はこれから留学する大事な身の上だ。

この学校始まって依頼の優秀な才能ある生徒である。聡子とは違うのだ。

「い、いいよ。あたし一人で帰れるから」

「だめだよ、橘さんわたしと違って可愛いもん！ 危ないって！
大丈夫！ ちゃんと家まで送ってあげるから！」

彼女は自信满满々聡子の手を引いた。いい人なのである。それが分かってるので聡子も彼女のことは好きだ。彼女の弾くピアノも好きなのだ。彼女の腕前に嫉妬するよりも先に、聞き惚れたくらいにうっとりするくらいの腕前で、性格も良く、でも聡子と同じように運動ができない。そこらあたりは欠点というよりは愛嬌である。

「そういうわけで、橘さんはわたしが送りますー」

周りの先生方は大慌て。でも彼女はいつもマイペース。聡子の手を引く張って嬉しそうに笑っている。

「大丈夫！ 安心していいよ！ わたし、強いから！」

「……運動苦手じゃなかったっけ？ あたしと一緒に」

「……大丈夫！ 力はあるから！」

めげない彼女に、聡子はようやく笑った。先生たちも彼女の勢いを止められない。結局彼女がちゃんと防犯ベルを持っていることを確認して、押し切られる形で彼女と聡子の下校を認めた。

いろんな話をした。聡子がピアノを習っているという彼女は嬉しそうだった。

もうすぐ辞めるのとは言わなかった。ただ彼女とピアノの話をしているとなんか楽しかったから言えなかった。

「今何の曲を練習してるの？」

彼女が訊き、聡子が答える。

「そうなんだー、けっこうコツがある曲だよね」

ニコニコと、彼女は言う。

「わたしが今練習してる曲ね、難しいんだよー。もうイヤになっちゃうくらい」

彼女でも難しいと思うのかと思わず聡子が呟くと、彼女は苦笑し

た。

「難しいよー。泣きそうになるくらい。でも、やっぱり楽しいからね、弾くの。結局好きだから弾いちゃうの。ピアノ馬鹿だから。他には何も出来ないしねー、頭悪いし」

あっけらかんと彼女は言う。そんなことないでしょと聡子が言うと、彼女はこつそりと中間テストの順位を教えてくれた。

聞いて目が丸くなった聡子だ。自分とほとんど変わらない。

「ね、馬鹿でしょー？ あははは、もう開き直ってるのー」

聡子も自分の順位を教えた。彼女ばかりに言わせるのは不公平だろうし、彼女にとっても親近感が湧いているせいもある。

「おお、仲間だー。嬉しいー。あははは、失礼かな。ごめんね橘さん」
そんなことないよ嬉しいよ。聡子は心から言った。同じピアノ好きで、同じく成績が悪くて、運動も出来ない、聡子と似ている彼女。「そう？ 嬉しいなあ。なんか留学決まってるから皆よそよしくて、ちよつと寂しかったの。ありがと」

照れくさそうに彼女は笑った。

「でもねー、さすがにねー、英語は勉強しないとまずいの。行って英語くらいは話せないのはちよつとまずいでしょ、うん」

そうだね、ちよつと厳しいよねと聡子が同意すると、彼女は大げさに頭を抱えた。

「えいご……苦手だー！ どうして世界共通じゃないの日本語ーっ」

本気で叫んでいる。彼女の心境も分かったので聡子は笑った。

共通語が日本語なら苦労しないのにね。そう言うと彼女は首振り人形のように何度も頷いた。

「ほんとそう。本当そう！ ううー、ジャパニーズオンリーでいいじゃん、ねえ？」

ふてくされている。ピアノを弾いているときは大違いの表情で、彼女はくるくると表情を変えた。

聡子と変わらない年の彼女。これから留学する彼女。

聡子とは違うけれど、聡子と似ている彼女。

音楽に魅せられている、自分と彼女。

やはり、辞めたくない。聡子は思った。

彼女と一緒に、彼女と同じところで、ピアノを弾いていたいと思
った。

たとえ彼女ほどの才能がなくても続けたいと思った。

もし、その願いがかなうのならば。

本当にその思いがかなうのならば。

巻・ピアノフォルテく叙情詩（アリア）・4

「大丈夫だよ」

聡子はそう言って彼女に笑いかけた。

「ピアノ、好きでしょ？なら、大丈夫だよ」

自分と同じように、彼女はピアノを愛している。弾くことに喜びと至福を感じている。

「きつと、耐えられるよ」

何を失っても。

自分の部屋の中で、聡子は楽譜を広げていた。架空の鍵盤を叩きながら考えている。ピアノ教室には今月いっぱい通える。今月とは言っても、もう半月もない。

「もし……もし本当に、望みがかなうのなら」

双子に言われた言葉が頭をよぎる。

『要らないところを頂戴。望むものをあげるから』

でも、それは出来ないことだろう。聡子が欲しいのは物ではない。ピアノを続けてプロのピアニストになりたいという、夢だ。

オーケストラに加わっても引けを取らないピアニストになりたい。それは他人にかなえてもらうものではない。

他人がかなえられるものではない。

「できるよ」

背後からの声に、聡子は振り返った。

愕然と硬直する。

あの双子がいた。

同じ顔、同じ服。音楽室で会ったときのように、固く手を繋いで立っている。

「な、んで……どうやって!?! どこから!?!」

両親のどちらかが帰ってくるまで玄関には鍵がかかったままだ。窓だってほかの部屋は開いてはいない。聡子の部屋の窓は開いているが、窓は彼女の横にある。そこから入ってきたのならばいくらなんでも気がつく。

玄関の鍵を開けて入ってきたのか。ドアの開く音も聞こえなかったよな気がするが、楽譜に気を取られていたせいかもしれない。

「で、出てっつてよ!!」

「いいの?」

双子は首をかしげた。同じ方向に、同じ人間のように。

「いいの?」

もう一度、訊いてくる。

「要らないところはないの? 望みと引き換えに、無くしてもいいと思うところはないの?」

表情が浮かんでいないと、本当にどちらがどちらか分からない。

もう一人が言う。

「身体のどこかと引き換えにしても、かなえない望みは貴女にはないの?」

強い願いはないのかと。自分のどこかを売り払ってでも、やり遂げたいことはないのかと。

「考えてみて? ないの? 本当に、ないの?」

「あるよ!!」

聡子は立ち上がって叫んだ。やりたいことはある。したいことがある。

「でも出来ないの!! だめなの!!」

止められてしまった。聡子の未来は両親が決めてしまった。娘の希望も親は取り払ってしまったのだ。

ピアニストなんてなれない、才能がない。夢を追うことはできないと。

親としてはもっと明確な将来を決めて欲しかったのだろう。

現実的に、地面に足をつけて、いつまでも夢ばかり見ていないで、

前を見なさいと。

可能性を摘んでしまう考え方だ。まだ聡子は中学生だというのに、夢を見ることすら出来なくなった。

「できるよ」

にこやかに、片方が言う。表情があるほうは、音亜だ。

「わたしたちには、できるよ。貴女が要らないところをくれたら、お礼にかなえてあげる」

「どうやって!」

聡子は叫ぶ。

「さあ」

無表情に優亜は首をかしげた。

「でも、かなうよ。それが貴女の望むカタチとは限らないけれど、かなうよ」

「意味分かんないよ……!! それでどうしてかなうって言えるの!?!」

「かなうからだよ」

意味の分からない言葉。双子本人たちにも分からないというのに、何故そこまで彼女たちは断言できるのか。

「じゃあかなえて見せてよ」

「いいよ。どこをくれる?」

嬉しそうに音亜が聡子を見る。

「要らないところ、どこくれる?」

聡子は考え込んだ。自分の身体の要らないところ。今まで考えたこともなかった。

まず第一に手はだめ。ピアノを弾くためには絶対に必要だ。耳もだめ。聞こえなければ音を楽しむことが出来ない。足もだめ。ピアノにはペダルがあるからだ。

目もだめ。楽譜が読めない。

「……あのさ、たとえば鼻って言ったらどうなるの? 鼻がなくなるわけ?」

「そうだよ。だって要らない場所でしょう？ 無くなっただっていいじゃない」

無表情に優亜が説明してくれる。

「鼻が要らないの？」

「ままま、待って！ 違う！ 今のは質問だから！ 答えてるわけじゃないの！」

あわてて遮って、聡子は真剣に考えた。双子を試す気満々だった。どうやって入ってきたか知らないが、望みをかなえてくれるというなら、出来るものならしてみろという気分になってしまっている。

身体の一部。要らない場所。なくなっても困らない場所。しばらく考えて、ようやく答えは出た。

「じゃあ、足の爪をあげる」

「足の爪？」

双子は首をかしげた。

「そう、爪」

これならなくしてもいい。痛くなさそうだし。なくしても痛くない場所で考えて、思い浮かんだのは髪と爪だった。

切っても痛くない場所だ。

「それでいいの？」

小首をかしげたまま、双子は訊き返してきた。てつきりそんな場所ではだめとか言われるものだと思い込んでいた聡子は、逆に訊き返してしまう。

「え、爪でいいの？」

「いいよ。それが貴女の要らないところなら」

「じゃ、じゃあ爪。それでいいなら、足の爪をあげるよ」

「頂戴」

にこやかに、無表情に、双子は頷く。

無表情に、妹の音亜と手を繋いだまま、優亜がしゃがみこんだ。細い手が、聡子の靴下に包まれた足先を撫でる。爪の部分だ。

「な、なにをするの？ まさか……むしる気！？ 痛いのはイヤよ！？」

「むしらないよ」

撫でて、優亜は顔を上げた。

「頂戴、ね」

手を離して、立ち上がり、優亜は聡子の顔を覗き込む。硬質なものを感じさせる無感情な瞳で、聡子を見つめて彼女は言った。

「約束、したから」

聡子は知らず唾を呑んだ。何かとんでもないことをしたような気がする。けれどやっぱりやめたとは言えなかった。

優亜の瞳を除いた瞬間に、かなうかもしれないと思ったからだ。

どうしてそう思ったかは分からない。でも直感した。

足の爪は失う。でも、もっと大事なものがかなう。

自分の夢、自分の望み。

ピアノを続けたい。ピアニストになりたい。

世界的なオーケストラに加わっても恥ずかしくないようなピアニストに。

彼女のような才能溢れるピアニストになりたい。

彼女と同じ道を、彼女と一緒に、並び立つようなピアニストになりたい。

なによりも、ピアノを弾いていたい……！

それが聡子の望みだ。

双子はそのまま聡子の部屋のドアから出て行った。

見送ってしばらくしてから聡子は我に返る。あわてて走って行って、玄関の鍵を確かめた。閉まっている。窓の鍵を確かめに走った。

窓も確かに閉まっている。開いていたのは聡子の部屋の窓だけだ。家の中に入りにできそうなところは全て戸締りがしてあった。

では、あの双子はどこから入ってきて、どこから出て行ったのだらう？

そう言えば、靴を履いていた。揃いの靴。室内なのに屈を履いていて、でも聡子の部屋のカーペットは汚れていなかったし、家の中のどこにも靴跡はなかった。

「なんなの……？」

幽霊か何かだろうか。でも、触れた手は別に冷たくはなかった。ごく普通の人間の少女の手だったような気がする。

「ち、超能力者とか？　ありえないよねいくらなんでも」
でも、あの瞳は。

あの瞳を見た瞬間に何故自分の望みはかなうと思ったのだらう？
足元を見下ろした。靴下に包まれた自分の足。つま先。
足の、爪。

しゃがみこんで恐る恐る触ってみる。爪の感触は靴下越しにちやんとあった。

それだけでは安心できなくて靴下を脱いでみた。爪はちゃんとある。

「なんだ……あるじゃん……もーっ！」

びくついて損した。思いながら双子の片方が触ったときのようにつま先を撫でた。別に爪が取れたりもしない。

「なんなのさ、あの人たち」

立ち上がって脱いだ靴下を洗濯機に入れようと脱衣所に歩く。

やっぱり変質者なのかなとも思った。

両親が帰ってきたら、防犯ベルを買ってくれるよう言ったほうがいいかもしれない。

* * *

「約束、したから」

「約束、したからね……」

聡子と彼女はどんどん仲良くなった。ピアノが大好きな同士で話があったのだ。腕の差はあれど、ピアノを弾くことや、その音を聞くことが大好きなことに変わりない。

聡子は彼女の家遊びに行くようになった。彼女の家には立派なグランドピアノがあった。

何度も有名なコンクールに優勝している彼女にふさわしい楽器。

「弾いてみる？」

「いいの!？」

「いいよー、当たり前でしょー」

彼女の勧めのままに聡子は大きなピアノに触れてみた。かき鳴らしてみる。

音楽室のピアノとは違う、綺麗な音がした。プロが調律するからなのか、楽器そのものがとても良いからなのか。

おそらくその両方だろう。うっとりするような音色を奏でるピアノ。

ひきつけられるように自分の好きな曲を弾いてみた。信じられないくらいいい音が出た。

「うわ、すごいねえ、このピアノ！ いい音ー！ 嬉しい」

目を輝かせる聡子に、彼女はブンブンと首を振った。嬉しそうに目を丸くしているのはどうしてなのか。

「違うよ、聡子が上手なんだよー、びっくりした、上手いじゃない！ 初めて二年経ってないんでしょ!？ すごいよ!！」

「まーたまたー、喜んじゃうよ、そんなお世辞言われたら」

「ほんとだつてば!！ 本当!！ ちよつと待ってて!！」

彼女はなんだか嬉しそうに部屋を出て行った。聡子は少しだけ首をかしげる。彼女が戻ってくるまでピアノに触っていいのかなと思いつつ、誘惑には勝てずに曲を奏でた。

音楽室にもしばらく行けなかったから、本物のピアノに触るのは久しぶりだ。家のエレクトーンはまだ捨てられていないが、両親がいないときでないと弾けない。塾が終わる頃には両親は帰ってきているし、休日には父親が寝転んでいる。音楽を奏でるチャンスはほとんどなかった。

嬉しいと思った。弾けることが嬉しい。指が忘れないうちに何度でも弾きたいと思った。

彼女が留学する前に、また来てもいいだろうか。彼女が留学から戻ってきてても、またこのピアノを触らせてくれるだろうか。

でも、三ヶ月もしたら指が忘れちゃうかなとも思う。

楽器には触らないと忘れてしまう。演奏は身体が覚えてくれるものだ。

ピアノならば指先。頭で覚えるよりも先に、指が覚えてくれるもの。

もっと触っていたいと思った。でもいつまでもこうしてはられない。

それはとても悲しい。

あきらめなければいけない夢は悲しいだけだ。

続けたいのに。

続けてはいけない。

弾き終わるころに彼女が戻ってきた。

「ねえねえ、あのね聡子、わたしちょっと考えたんだけど」

「なにを？」

ピアノの前の椅子に座ったまま、彼女を見上げると、彼女は嬉しそうにピアノの鍵盤にふれた。

「わたしが向こうに行っている間、このピアノ弾きに来てくれない？ できたら二、三日にいつぱんくらいの割合で」

「え」

「三ヶ月も誰も触らないの可哀想じゃん。聡子なら丁寧に扱ってくれるだろうし……あとは、うちの両親もピアノの音がすれば、わた

しがない寂しさもまぎれるかなーっと思つて。あ、でも忙しいなら無理だけど……今凄く楽しそうに弾いてくれてたし、聡子がピアノ辞めるのって勿体ないなあって思っちゃったの」

彼女は聡子がピアノを辞めさせられたことを知っている。今は通いたくもない塾に行かされていることも彼女に話したからだ。

「い、いいの？ 触りに来て」

「いいよ。っていうか、ぜひ来て欲しいんだけど。お願い」

両手を拝むように合わせて彼女は聡子に懇願する。願ったりかなったりだった。彼女からの頼みといえば聡子の両親もうるさくは言わないだろう。

「うん！ 来る！ 絶対来るよ！」

嬉しくてたまらなかつた。ピアノが弾ける。練習できる。それならどんなことだって我慢できるだろう。つまらない塾通いも、きつと我慢できる。

「本当にいいの？ 高価いピアノでしょ、これ」

「いいって言ってるでしょー。むしろこっちからお願ひしてるんだもん。大丈夫？」

「大丈夫！ っていうか無理してでも来る」

「あはははは、そこまで言ってくれるのなら安心かなー」

彼女は嬉しそうだった。聡子も嬉しかった。

お互いに、できる限りのことをしようと思う相手に巡り会えた喜びを、知った。

二週間後、彼女は異国の地へ旅立った。

手紙を書いてくれると言った。聡子も返事を書くよと答えた。

三カ月後に帰ってきたら、お土産を楽しみにしていてねと彼女は笑っていた。

聡子は彼女にお守り代わりに自分の使っていた楽譜を持たせた。それくらいしか思いつかなかつたから。

お小遣いだって少ない中学生だ。精一杯の気持ちだった。彼女の家の前で彼女を見送って、元気で帰ってきてねと手を振った。

その帰り道。

聡子は事故にあった。

居眠り運転の車が歩道を歩いてきた聡子に突っ込んできたのだ。

何が起きたのか分からなかった。

気がついたら聡子の身体は車道に打ち付けられていて、あっという間に意識は薄れて消えていく。

あたし、死ぬのかな。

そんな風に思った。

彼女と約束したのに。彼女のピアノを弾きに行くと約束したのに。死ぬのかな。ピアノ、弾けると思ったのに。

「頂戴ね」

「約束、したもののね」

どこかで聞いた声がして、聡子の意識は闇に墮ちた。

気がついたら、病院だった。ずきずきと全身が痛む。泣き出したくても出来ないくらい痛かった。

何が起きたのか分からなかったけれど、両親は聡子の顔を見て泣き出した。

どうやら頭を強く打っていて、ずっと意識が戻らなかったらしいと後で聞いた。

ずきずき。痛みが取れない。

全身打撲。幸い骨折はしていない。道路にたたきつけられ、頭を打ったわりには脳にも異常はなく、打撲がもう少し良くなったら退院できるだろうといわれた。

ただ。

足が。

ずきずきと痛む。

「爪……」

聡子は自分の足先を見つめてゾツとする。

指先に巻かれた包帯の下に、爪はない。

車がぶつかってきたとき、聡子の足先をタイヤが踏みつけたらしいと医者は言ったが、ありえない。

車は聡子の身体を撥ね飛ばしたのだ。宙に浮いた身体をつま先を、どうやってタイヤが轆き潰すのか。大体、つま先を轆かれたのなら指も潰れているはずだ。

なのに足の指には潰れるどころか傷がない。綺麗に全部の爪だけがはがれている。それも両足揃って。

爪で済んで良かったよと医者や両親はホツとしていたが、聡子は身震いした。

意識を失う寸前にした、声。

あれは。

偶然とは思えなかった。幻とも思えなかった。

誰にも言えなかった。

痛むつま先を眺めて、聡子はゾツとするだけだ。

退院したその足で聡子は彼女の家に向かった。アチコチ痛むけれど、彼女とした約束を果たしたかったし、何よりピアノに触れたかった。

彼女の母親が迎えてくれた。事故にあったと聞いていたらしい。大丈夫なのと心配してくれたのが嬉しかった。

大丈夫ですと答えて彼女のピアノを弾いた。
身体は痛むけれども、ピアノに触っている間はそれすら忘れられ
た。

やっぱり楽しい。辞めたくなかった。それだけは思う……。

彼女が強盗事件に巻き込まれたと聞いたのは、その数日後だった。

「どうして」

何で彼女が。どうして彼女が。

だって彼女は何も悪いことなどしていないのに。

ただ夢をかなえるために異国の地まで行って、夢のために頑張っ
ていたのに。

誰よりも誰よりも頑張っていたのに。

あまりにもひどいではないか！

聡子は泣いた。

彼女の演奏がとても好きで、彼女と一緒にピアニストになりたか
った。

聡子は泣いた。大好きな彼女に何の言葉もかけてあげることが出
来ずに、遠い場所で、泣いた。

「約束、したからね」

「頂戴ね」

「聡子」

声をかけられ、聡子は振り向いた。

「緊張してる？」

「してるよ。しないわけないでしょ」

初めてのコンサートだ。

ピアニストになりたいと願いつづけて、その夢はかなった。

中学生のとき、あの『事件』から聡子はあきらめることを止めたのだ。

まず両親とぶつかった。もっとピアノを続けたいと。やりたいことがあるからさせてくれと。

そのかわり死に物狂いで努力した。勉強して成績を上げ、両親を納得させた。本当に聡子がやりたいことなのだ、両親は納得してくれて応援してくれるようになった。

高校に上がるころには、演奏技術も飛躍的に上達していた。

いい先生がついてくれたからだ。

「夢、かなったね」

「そうだね、かなったよ」

顔を見合わせて笑う。

聡子の笑顔は彼女には見えていないけれど。

それでも彼女は笑っている。今日は彼女のコンサートでもあるのだ。

プロピアニスト同士の、合同コンサート。

聡子と彼女のコンサートだ。

「足、大丈夫？」

「うん、平気。そっちこそ、大丈夫？」

「もう慣れたよ。見えなくなって十年以上経つしね」

彼女は楽しそうに言う。彼女の両目には眼球がない。まぶたは閉じられたまま。

聡子の両足の爪がないように。

「ほんと、無茶」

聡子があきれて言うと、彼女は唇を尖らせた。

「なによ。爪あげた人に言われたくないぞー」

「あたしは爪だもん。目は見えるもん。だいたいね、目をあげるなんて言う？ ピアニスト目指してる人が」

「思いつかなかったんだよー。言っちゃったもんはしょうがないでしょ」

「あんだそういうところあるよね。昔から」

昔から。その単語に聡子と彼女は吹き出した。

中学生のとき、彼女は強盗事件にあい、割れたガラスで両目に重傷を負った。

中学生のとき、聡子は交通事故にあい、車に轢かれて両足の爪を失った。

彼女の両目は戻らない。

聡子の足の爪が生えてくることもない。

両目は閉じられ、足先はいつも包帯で隠されている。痛みはもう、どちらにもないのだけれど。

「ほんと、馬鹿だよなー」

「ほんとにね、お互いにねー」

お互いがプロのピアニストになってから、どちらもあの双子に会っていたことを知った。

聡子は足の爪を、彼女は両目を。

双子にあげてしまったのだと、知った。

願いごとは同じ。

『彼女と一緒にピアニストになりたい』

馬鹿みたいな願い事。お互いにお互いを認め合い、だからこそ馬鹿みたいに自分の身体の一部を差し出して。

視力を失った彼女を支えたのは聡子だった。ピアノを辞めさせられた聡子を支えたのは彼女だった。

ここまで二人で歩いてきた。

二人だから、歩いて来れた。

これからも二人で歩いていく。仲睦まじく手を繋いでいた、あの日出会った双子のように。

あの双子は、二人にそれを教えてくれたように思う。

「あのさ、がんばったよね」

「うん、がんばったよ」

「これからも、がんばろうね」

「うん、がんばろうね」

笑いあって、二人は握手した。

絡み合うように演奏が始まる。

二人だけのアリア。

中学生の頃からの親友同士。片方は足が不自由で、片方は目が不自由で、でもお互いに支えあって夢をかなえた二人の女性。

夢をかなえた彼女たちへ拍手が響く。

その友情を、腕前を。

讃える拍手が、鳴り響く。

吉・ピアノフォルテ 叙情詩（アリア）・5（後書き）

第一章が終了しました。聡子が得たもの、失ったもの。幸いなのか
もしれない、彼女らでした。

式・アスリート〜狂想曲（カプリッチオ）・1

冬から不連続きだ。

彼はそう思っている。

志望校に入れなかったのは不運のせいだ。

受験日に風邪を引いた。家を出たところで滑って転んだ。汚れたズボンを気にしながら駅に行ったら、人身事故があつて列車が遅れた。

余裕を持って家を出たのに、つくころにはギリギリで、あげく隣の席に座った奴がゴホゴホうるさく咳き込んで全然集中できなかった。

家に帰って熱があつたことに気がついた。転んで濡れたせいだろうか。どつりで試験会場で頭痛と寒気がしたはずだ。

受かる自信は直前の日まであつたのだ。担任も間違ひなく受かるだろうから、変に緊張さえしなければ大丈夫だと太鼓判を押していた。

なのに、落ちた。

滑り止めに受けたところは受かったが、そこに行けても嬉しくない。自分が行きたかつたのは、名門で名高い高校だつたのだ。

最初は推薦で行くつもりだった。でも、通つたのはほかの奴だった。

そこからすでにケチがついていたのかもしれない。

入学して二ヶ月が経とうとしているのに、彼は納得していなかった。

自分が通うところはここではなかったのだ。

本来ならもつと学業のレベルの高い高校に通っているはずだった。こんな、運動しか能のないような高校ではなくて、もつと頭のいい学校に通っているはずだったのだ。

気に食わない。

「おい、皆瀬みなせ」

かけられた声を、彼は無視した。声をかけてきたのは同じクラスの前の席にいる奴だ。いつもうるさく声をかけてくる。何よりの不運は、こいつに目をつけられたことだろう。

「みなせー、皆瀬明彦あきじこくん！ 聞こえてるー？」

しつこい。明彦は無視して歩き出す。付き合うつもりはなかった。こんなレベルの低い学校に楽しく通うような連中と友人付き合いをするつもりはないのだ。

三年の間にもっといいところに転校するなり何なりするつもりでいた。

留学するのでもいいかもしれない。こんな高校から留学生が出るといふなら、学校のほうは大手を振って送り出すだろう。

「皆瀬ー、皆瀬ー、みつなっせー」

無視。

「みつなっせ、みつなっせ、皆瀬」

だんだん調子っぱずれの歌のような呼び方になってくる。周囲の視線がちくちく刺さってきた。

さすがに耐え切れなくなって、明彦は振り返る。

「うるさいっ」

「おお、振り返った！。よし、次からはこうしよう」

嬉しそうに騒いでいるのは、明彦より少し背の小さい少年だ。明るい表情で不機嫌な明彦の態度にもめげずに話しかけてくる。

「なあ、まだ部活決めてないんだろ？ 陸上部入れ！ な！？」

「断る」

何度目の返事だろう。うんざりしながら明彦は断言した。入学し、同じクラスになり、こいつが前の席に座ったときからずっと勧誘されているのだ。

とにかく陸上部に入れと。

「入って、一緒に走ろうよー、青春しようぜっ」

「暑苦しい。寄るな」

取り付くしまもない明彦の返答。

が、彼は聞かない。素直に聞くような性格なら、この二ヶ月付きまどったりはしないだろう。

「入れ！ たーのしいぞー。女の子多いしー！」

「知らん」

うるさいと言い捨てて明彦は歩き出した。これ以上付き合うつもりはないのに、奴はついてきた。

「なんでよ、女の子可愛いじゃん。うちの部、けっこう可愛い子多いよ？ 運動してるからなかなかスタイルいいし。ウハウハできますぜ、お兄さんっ」

ウハウハしているのはお前だけだろうと明彦は内心で思った。口に出すと喜んで絡んでくるので、喋らないほうがいと学習している。

無言で通す明彦に、奴は首をかしげた。

「あら？ 女の子に興味ない？ おつまえそれでも高校生の男かつ！ 思春期の男は女の子見ただけでイロイロと反応するもんだろ！」

うるさい。そうとしか思えない。大体女のどこがいいのだ。やかましきくどうでもいいことを喋るだけだし、かと思ったらいきなり団結してとんでもないことをやりだすような女子のどこがウハウハできる存在なのか。

「はっ！？ ひよっとしてお前男好き？ そーか……早く言えよ。」

陸上部のためなら俺はこの身体を売るぞっ！ さあ、喰えっ！」

目前に出てポーズをとる奴に向かって、しらじらと冷たい視線を向け、明彦は立ち去った。

取り残された奴の周りに、冷たい風が吹く。

「……ツッコんでよ、皆瀬……ボケにはツッコむのが礼儀だぞ……」
寂しく呟く背後からの声に、付き合うつもりは毛頭なかった。

なんなんだあいつは。

はつきり言ってイラつく。毎日毎日、しかも登校直後から下校す

るまで奴は声をかけ続けてくるのだ。内容はいつも同じ。

『陸上部に入れ。一緒に走ろう』

部活などやっているヒマはない。

俺はもつと良い学校に移るんだ。

こんなところでやらせたらしているお前らとは違う。

もつともつと成績を上げて、いい学校に行くんだ。

何度言っても、奴はあきらめない。

この二ヶ月ずっとそうだ。

『部活楽しいぜ？ やろうよ』

『学校移ることないじゃん。ここもいいとこだつて』

『だから悪くないよー？ いや、俺は真面目ですけどね』

『成績いいじゃん。この間の初テスト堂々トップだったじゃん。ほかの学校行くことないってー。一緒に青春しようよお』

そんな阿呆な言葉ばかりが返ってくる。きつと奴には人の言葉が通用しないのだろう。

明彦はそう思うことにした。

奴はサルだ。人間ではない。人語で説得しようとしても無駄なのだ。

大体明彦を陸上部に誘う理由が分からない。

まあ、運動が出来ないわけではない。確かに走れば足は早いほうだ。興味がなくて真面目に走ったことはないが、それでも中学の頃は上位に入るくらいだったから、真面目に走ればかなりのレベルだろうとは自分でも思う。

が、興味はないのだ。

中学の頃だつて何度も誘われたが全て断った。勉強したかったからだ。部活などで時間を取られなくなかった。内申に響くから形だけでもどこかの部活に入っていたほうがいいとも言われたが、そのくらいで内申がどうにかなるような頭ではないと思っっている。

頭が固いといわれたことは何度もある。その度に明彦は鼻で笑ったものだ。

偏差値の低い連中が何か言っているとしたか思わなかった。そのくらいにしか思わなかった。

だが、高校に上がれば中学の連中とは縁が切れる。レベルの高い学校には自分にふさわしい人ばかりがいるはずだ。そんな連中とならば友人になってやってもいいと思っていた。

が、現実には、目指していた学校ではなく、程度の低い連中にまた囲まれることになってしまった。

筆頭は、奴だ。

同じ中学ではなかった奴が、何故明彦を執拗に陸上部に誘うのか分からなかったが、どんな理由があるにせよ迷惑であることに違いない。

あまり付きまとうようならストーカーとして訴えることは出来ないだろうか。

家まではついてこないからストーカー扱いは難しいか。ならば教師に訴えるしかないが、こんな学校の教師が頼れる人物とは思えない。

自分で防衛するほうがずっと確実か。

しかし、とんでもなくうるさいサルを防衛するのはどうしたらいいのだろうか。

あんなタイプには初めて遭遇した。ある意味、第一種危険生命体との異種遭遇・緊急事態である。

どう対処したら良いのだろう。無視はあまり効果がない。罵倒もしてみたが、何故だか心底から理解できない反応で、奴は嬉しそうに『わーい、皆瀬に怒られたー！』などと言って喜んでいくくらいだから駄目だ。

イヤミ……明彦の高度なイヤミが通じる脳みそが相手にない。いじめ。自分的に許せないのでやりたくない。

言葉での拒否は最初の段階でやって効果がないことがよく分かった。

どうするべきだろうか？　こんなくだらないことで頭も時間も使い

たくはなかった。

しかし、奴が明彦の前の席順のため、授業が始まり、終わるたびに捕まる。休み時間のたびに同じことの繰り返しだ。

『陸上部に入れ』

『入らん』

『入れ』

『イヤだ』

『入ってくれよう』

『断る』

『おねげえしますだ、お代官様、入ってくださいせえ』

『……くだらん。入らないと言っているだろ』

そんなやりとりが、次の授業が始まるまで続けられる。

明彦としてはこんな阿呆なやりとりなどしたくないのだ。奴に付き合いたくもない。

時間の無駄だとはつきり言える。

無視して次の授業の予習でもしようと教科書を出すと、その教科書を手で引きずり倒して話しかけてくるのだから、頭にくる。

どこまで自分の邪魔をすれば気が済むのか。

しかもそれをクラスメイトが面白がっているのがまた頭にくる。

またやっているよあいつ『ら』。そんな声が聞こえてくるたび、

こいつと一緒にしないでくれと怒鳴りたくなるくらいだ。

複数形にするな。おれは奴とは別の人間で、ましてサルでもない。

同一視しないで欲しい。心底から思う。

奴とコンビにされるのはごめんだ。

ぐったりと息をついて、明彦は校舎を出た。昼休みに弁当を食べようとしていたのだが、教室では奴がうるさいので、どこか別の場所で食べようと歩いていたら、奴に捕まってしまったのだ。食堂に行っても良かったけれど、奴が来るかもと思うと安心して食事も出来ない気がした。屋上はほかの連中がうるさい。食事は落ち着いて取るものだと思っているので、人が来ないところが良かった。

校舎をぐるっと回って、裏側に入り込む。木陰に入り込めば校舎からは見えない。

腰を下ろしてようやく一息つく。高校に入って奴に遭遇したせいで、いらん苦勞をしているような気がひしひしとする。

一刻も早くほかの高校に転入しなすべきだ。心から思う。

もっと偏差値の良いところなら、あんな異種生命体はいないだろう。

少なくとも人の言葉が理解できる連中ばかりのはずだ。

全く、あの高校に受かってさえいたら、こんな苦勞はしなくて済んだだろうに。

「要らないところはない？」

声が出たのはそのときだった。

式・アスリート〜狂想曲（カプリッチオ）・1（後書き）

ここから第二章です。とても嫌な考え方をする少年・明彦に、双子が語りかけ、そして明彦は？

式・アスリート〜狂想曲（カプリッチオ）・2

眉を寄せて明彦は声がしたほうに視線を向ける。

女の子が立っていた。同じ顔をした少女がふたり、手を繋いで立っている。多分双子なのだろう。ここまで同じ顔をしていて、服装まで同じなのに、赤の他人や単なる姉妹と言う可能性は薄い。

「？」

明彦は周りを見回した。自分しか見当たらない。と、言うことはこの双子は明彦に声をかけてきたのか。それにしても意味の通じない言葉だ。

着ている服もこの学校の制服ではない。どこか他校の生徒か。

平日の真昼間から、何をしているのだろう。

「何のことだ？」

片方の少女がにこやかに微笑んで、言う。

「わたし、音亜」

そして手を繋いでいる同じ顔の少女を指す。こっちの少女はまったくと言っていいほど表情を浮かべていない。同じ顔なのにひどく違和感が付きまとう二人だ。

「こっちは優亜。おねえちゃんなの」

「いや、名前を訊いているんじゃない。要らないところが何とかって言うていたことの意味を訊いているんだ」

こっちの言うている意味が伝わっていないのだろうか。念のために明彦は碎いて説明してみた。この二人も、サルのように人の言葉が通じないのだろうか。

「貴方の身体で、要らないところはない？」

無表情に優亜という名らしい片方の少女が言う。

「身体……？」

この二人は一体何を言っているのか。冗談や嘘でこちらをからかっているのかも思ったが、そんな様子ではなかった。瞳は本気な

のである。

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」

「貴方の望むものをあげるよ。だから頂戴」

真摯に、双子は明彦に語りかけている。

明彦の身体のどこかを、くれないかと。

「臓器移植でもして欲しいのか？ あいにくとおれはドナーじゃない。他を探したほうが良いんじゃないか」

何かの病気、内臓に重大な疾患でもあって、移植相手でも探しているのかと明彦は見当をつけた。

それならこんなところをうろついているよりも、より専門的なところに行つて訴えるべきではないかとも思う。ドナーでもない素人に話しかけても、移植が成り立つわけがないだろう。ここは学校で、病院ではなく、まして明彦はドナー登録をしているわけでもない。

素人同士の約束で移植手術が成り立つとも思えない。

多分、法律やら何やらが邪魔をするだろうとも思った。

大体、臓器を提供するつもりもない。

「他を探せよ」

あつさりと断つた。

「要らないところ、ないの？」

小首をかしげて音亜と名乗った少女が訊いてくる。

「ない」

キツパリと言い切る。本当に要らないところなどない。明彦にあって身体は必要なところばかりだ。

「ほんとに、ない？」

「しつこいな。ない。いい加減にしないと人を呼ぶぞ」

他校の生徒らしい二人だ。こう言えば出て行くと思った。

双子は顔を見合わせ、お互いに首をかしげている。片方は不思議そうに、片方は無表情に。

同じ顔の、対照的な双子。

「ないみたいね、おねえちゃん」

「ないみたいね、音亜」

「じゃあ、違うのかな」

「じゃあ、違うみたいね」

頷きあって、双子は明彦を見た。

「違うみたいだから、ばいばい」

にこやかに、音亜は言い、

「ばいばい」

無表情に優亜が言い、強い風が吹いた。思わず目を閉じ、次に明彦が目を開けたときには、双子の姿は彼の視界内のどこにもない。

走り去ったにはしてはいなくなるのが早すぎる。どこかに隠れでもしたのか。

べつにどうでもいいか。わけの分からない双子に付き合っているヒマなどない。ただでさえ奴に付きまとわれて迷惑しているのに。

明彦は弁当のふたを開けた。のんびりしては昼休みに予習する時間がなくなってしまう……。

式・アスリート〜狂想曲（カプリッチオ）・3

「違ったね」

「うん、違ったね」

「要らないところ、ないって」

「うん、ないって」

頷いて、無表情に優亜が顔を上げる。

「……あ、コッチの人みたい」

「え、コッチの人なの」

「間違っちゃったね」

「そうだね」

「行こうか」

「うん、行こう」

にこやかに頷いて、音亜は姉の手を引いた。

「要らないところはない？」

「貴方の身体で、要らないところはない？」

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」

「貴方の望むものをあげるよ。だから頂戴」

双子の声に、彼は。

「陸上部、陸上部でございます、楽しい楽しい陸上部、お、その皆瀬くん、楽しい陸上部に入りましょう！！」

「……断る」

誰かなんとかしてくれ。そんな気分だ。奴の調子は変わることなく、明彦への勧誘も毎日毎日変わらない。

「他に足の速い奴ならいくらでもいるだろう」

うんざりした気分ですう言ってる。

「や、皆瀬ほど速い奴いないのよ、この学校。あとは俺くらい。セ
ンパイ方もいまいち遅いしー。俺のライバルは皆瀬しかいないっ！
というわけで入れ」

「入らん。そんな弱小部潰れてしまえ」

「はっはっはっ、潰れないよーっだ！ 弱小のわりに人数いるから
なっ！ どーだ、まいったか！？ と言うわけで入れ」

「入らん。なくなってしまうそんな部活」

「女の子多いんだぞっ！？ 潰したらロマンスがなくなるだろう！
せっかくお近づきになるチャンスなのに！ と言うわけで入れ」

「入らん」

しつこい。いちいち応対するのも腹が立つが、無視すると誰かが
止めるまで付け上がるのでやむを得ない。最初は無視すればおとな
しくなったのだが、最近はそれくらいではおとなしくならなくなっ
てきた。どこまでも懲りない男だ。うっとおしくてたまらない。

うるさいと怒鳴りつけてやろうと思ったとき、ふと気がついた。

「待て。どうしておれが足速いって分かる」

こいつとは中学も違う。明彦のタイムを知るチャンスなどないは
ずだ。

「え？ タイム計ったじゃん。体育の短距離。百メートル俺の次に
速かったろ」

けろりと奴は言い切った。そう言えばと明彦は思い返す。

確かに体育の授業で百メートル走のタイムを計った。あまり真剣
に走らなかつたので、実のところタイムもよく覚えていないが。

「お前のタイム計ったの、俺よ？ 覚えてない？」

それか。明彦は頭を抱えなくなった。

「なんかさー、余裕って感じで走ってたろ？ それで俺はぴんと来
たわけ。こいつは俺のライバルになるって！ と言うわけで入れ」
「入らん」

きつぱりと断ると同時に、心に誓った。

体育の授業で走るときは、もつと手を抜いて走ろう。

運動などどうでもいい。必要なのは学業だ。

運動神経と反射にしか脳みそを使わないサルの相手などしたくない。

「なーなー、一緒に全国目指そうぜ？」それがだめなら県大会で我慢するからさあ、ねーねー、パパあ、あたしのお願いきいてえん」

不気味にシナを作る奴を、綺麗に無視して明彦はノートを広げた。次の授業の予習をしなければ。

はやく転校、あるいは編入したい。学業で結果を出すのが一番の早道だ。

全国規模の模試でもあれば即座に受けてしまおうと心に決める。

こいつから早く離れたい。

こんな場所には居たくない。もともとこの学校は自分がいる場所ではないのだ。

「皆瀬ー、皆瀬ってばー」

ひたすら無視した。

「今なら豪華景品つけちゃうぞ？ えーと、イチゴミルクおごつてやる！ あ、コーヒー牛乳のほうが好みか？ ええい、ダンチヨウの思いで両方おごっちゃうぞっ」

どう聞いてもカタカナ表記にしか聞こえない“断腸”の思いに、明彦はゲンナリした。

くだらないことに何故ここまで必死になるのか。他を探したほうがどう考えても早い。陸上部に入る気などこれっぽっちもない明彦より、熱意あるほかの人間を誘ったほうがよほど効率的だろう。

大体こいつに全国や県大会に行くほどの実力があるのか。

明彦自身にもそこまでの力があるとは思わない。そもそもそれ以前に興味がないのだ。

運動するヒマがあるなら、少しでも勉強したい。大切なのは偏差

値だ。

そのときの明彦は確かにそう考えていたのだ。
それが彼の全てだったのだから。

数日後の科学の実験で、事故が起きるまでは。

何故その事故が起きたのか。理由は全くの不明だった。混ぜてはいけない薬品を混ぜたわけでもなく、ガスでもどこから漏れていたわけでもなく。

なのに、爆発が起きた。どこかで何か壊れた。もうもうと煙が上がり、生徒たちはパニックを起こして、とにかく室外に逃げ出そうとした。

何が起きたのか。爆発の近くにいた明彦は倒れてしまっていた。くらくらする頭を何とかおさえて身を起こす。

耳の奥がキーンと音を立てていた。爆発の影響で一時的に耳がおかしくなったようだ。

ひとつ頭を振って机に掴まるように立ち上がった。

とにかくこの場から離れなくては。発生した煙が有毒のものだったら命に関わる。

こんなことで死にたくなかった。ふらつく足でなんとか出入り口に向かったときだった。

「みなせつー！」

奴の声がした。耳鳴りに消されてよく分からなかったが、何か叫んでいるようだった。

振り返らずに進もうとしたとき、衝撃を受けた。

ふらつく身体では支えきれずに床に倒れる。その上に奴が覆いかぶさってきた。どうやら奴に突き飛ばされたらしい。

何をすると文句を言う前に、再びの衝撃。

奴の身体越しに。

ガシャン！ パリパリ！ 何かが壊れる音と共に、明彦の身体の

脇に落ちてきたもの。

蛍光灯だ。

「!？」

まさか。奴は動かない。明彦をかばうようにして、ピクリともしなかった。

「おい」

揺する。反応がない。

まさか。

明彦は何とか起き上がった。奴はぐったりとしていて動かない。頭から血が流れていた。

落ちてきた蛍光灯で、頭をざっくりと切ったようだ。動かすのはまずいが、まだ煙が充満している。このまま置いておくのもまずい。ましてこのサルは明彦をかばったのだ。

「くそ……サルのクセに……馬鹿が！」

悪態ついて奴の身体を肩に背負うように担ぐ。ぐったりとした人間の身体がこんなにも重いことを初めて知った。明彦自身もまだふらついていたが、なんとか実験室から出る。

廊下の離れたところに科学担当の教師がいた。

「お、おい、大丈夫か!？」

明彦と奴の様子を見て、あわてて声をかけてくる。

「見たままです。怪我しました。救急車を呼んでください」

教師はふところから携帯電話を取り出して、動転のあまり何度も間違えながら百十九番している。

奴を壁に寄りかからせて、明彦も座り込んだ。耳鳴りがひどい。

頭が痛い。

奴の流した血の色が目には焼きついてしまった。

気持ちが悪い。煙のせいだろうか。それともサルが自分をかばったりしたせいかな。

頭のどこかを切っている奴。落ちてきた蛍光灯が直撃したのなら、最悪死ぬだろう。

打ち所が悪ければ、助からない。

「おい、サル、この馬鹿、起きろ、聞こえてるのか」
かすれる声で呼びかけながら上着を脱いだ。とにかく止血しなければ。

上着を奴の頭に巻き、少しでも出血を抑えるしかない。頭には血管が集まっているので、たいした怪我でなくとも派手に出血すると知識はあった。しかし、蛍光灯に直撃されたのだとすると、かなりの怪我だろう。安心は出来ない。

「サルって……俺のことかあ？」

ぼんやりと返事があった。奴の目が開く。

「お前以外に誰がいる」

「ひでえ……こんなに尽くしてるのに、あなたっていつもそう……
そういう男よね」

「気色悪いことを言うな。こんな状態でもふざけるのかお前は」
あてている上着にじんわりと血が染みてきている。感触が気持ち悪いが手を離すわけにいかない。

「あ……なんか、血い出てる感じ……大出血中？」

「そうでもない」

嘘をついた。

「皆瀬、怪我してねえ？」

「……さあ。分かん。耳鳴りがひどくて頭痛はしている」

上着を染める、人間の血。紺色の上着が漆黒に染まっていく。

「俺、死んじやったら陸上部を頼む……」

「断る」

「ひでー、親友の頼みよ？ 最後の頼みかもしれないのよ？」

「いつお前と友人になった？ しかも親友か？ そんな覚えはないな」

「ひとでなしー」

「そこまで喋れるのなら死にそうにないだろ」

「……そうかも」

組曲～移し身の双子～

にへ、と奴は笑った。血まみれの顔で。

式・アスリート〜狂想曲（カプリッチオ）・4

パン！

スタートを告げる音。一斉に走り出す選手たち。

その中に、どうして自分が加わっているのか。

明彦は苦く思いながらも走っている。ぐんぐんと風を切り、ほかの選手を抜かしながら。

他より遙かに早くゴールラインを越える。脇でタイムを計っていた女子が歓声を上げた。

予想を上回るタイムだったのだろう。ほかの部員たちも走り寄ってきてストップウォッチを覗き込んでいる。

そんなに速かったのだろうか。ただ思い切り走ってくれと頼まれたから走っただけだ。

ざわざわしている部員たちの中から、嬉しそうな声上がる。

「ほーら見る！俺の目に狂いはなかったっしょ！？」 確かでしょ

！？ スカウトした甲斐があっただでしょ！？」

大声を上げているのは、奴だ。

蛍光灯に頭を一撃されても、残念なことに阿呆具合は変わらなかった。

そして、明彦をかばった奴の右耳はなくなっている。あの後救急車で病院に運ばれ、奴の右耳が根元から千切れてしまっていたことが知れた。鼓膜には異常はなく、音を聞くことは出来るが、ホコリやゴミが入りやすくなっているので注意が必要とのこと。

「まいったよ、蛍光灯に耳喰われちゃった」。病院で先生が度肝抜いてたさ。千切れてるーって」

退院してから、右側頭部にガーゼを貼って登校した奴を見て、明彦は自分をかばって負った怪我だということを忌々しく思った。

これではもう、断れない。大きな借りができてしまった。

そして、明彦は陸上部に入部した。するしかなかったのだ。奴は

気にすんなよと言ったが、気にしないほうが無理な話である。息を整えて、周りを見た。口々に凄い、速いと部員たちは騒いでいる。

確かに奴の目に狂いはなかった。明彦は短距離のスプリンターとして、類まれなほどの足力そくじやくを持つていたのだ。

「俺を褒め称えなさい。特に女子！ 惚れてもいいよ！」

明彦のタイムが速くてどうして奴がはしゃぐのか。走った当人でもない奴に、女子が惚れる理由などないだろう。

「阿呆だろ、お前」

心の底から言ってる。

「ま！ ひどいわ！？ あなたっていつもそう！ そういう男よね」

「それ、前にも聞いた」

「うおお！？ 皆瀬が……皆瀬がツツコミをつ！！ お兄さん嬉しいっ！ 成長したのねっ」

「……何秒だったんです？」

感涙にむせぶフリをしている奴は放っておいて、タイムを計っていた先輩女子に話しかける。

女子ははしゃぎながら見せてくれた。高校生男子の百メートル平均タイムを知らないの、このタイムが速いのか遅いのかの判断がつかない。周りで速いとか騒いでいるところから考えると、速いのだろう。一応訊いてみる。

「これ、速いんですか？ 遅いんですか？」

速いよ！ 全員に凄い勢いで即答された。思わずのけぞる。その反応に、嬉しそうに奴が明彦の肩を叩いた。

「ほら、言ったでしょ。天然なんだよ、皆瀬は。超のつく天然。すごいでしょ？ 天然記念物級の天然よ？」

「……意味が分からんぞ」

「ほら天然だ」

笑い声が上がった。部員全員が明彦を見て笑っている。笑う意味が分からない。眉を寄せる明彦はため息をつきたい心境だった。

こんなところでこんなことをしているヒマなどないのに。

「まあまあ、そんなに嫌そうな顔するなよ。これから俺と一緒に全国を目指そうぜ！」

明彦の憂鬱ゆううつも知らずに、奴は嬉しそうに言い切った。

一年が過ぎる頃、明彦は県大会で優勝した。全国大会にも出たが、そのときは五位だった。

奴は県大会までは一緒だったが、全国までは行けなかった。実力の差が出始めたのだ。

一度やると決めた以上、明彦は真面目に部活に出た。練習量は奴と同じ。でも、タイムの差は広がるばかりだ。そして、学力でも明確に差があった。

遥かに高いレベルの高校にも行けたが、体調不良のせいで落ちた明彦と、運動しか出来ない奴。

どうしようもない、差。

「何でも出来ていいな」

最近奴はそう言うようになった。走る明彦とのタイムが広がれば広がるほど、奴の目はどんどんすすさんでいったように思う。

それでも、走っている間は楽しそうだった。

いやそんな明彦と違って奴はいつでも楽しそうだったように思う。

「楽しいか？」

一度訊いた明彦に、奴は即答した。

「楽しいよ。楽しいだろ？」

どこがだ。言ってやりたかった。お前の怪我さえなければ部活なんて入らなかつた。今でも勉強はしている。だが、ほかの高校に移ることはあきらめた。あきらめるしかない。こいつに借りを作つたまま編入するのはイヤだった。全国全国とうるさいので、せめて全国大会で優勝してやるまでは辞められないだろう。

このままの練習量でいけばそう遠くないうちに優勝できると思う。

そのときこそ胸を張って辞めてやる。

右耳を失った奴にどれだけ頼まれても辞めてやる。

全国で優勝してしまえば、陸上部に在籍する理由がなくなるはずだ。まあ、県大会で優勝し、全国でも五位に入ったことで、アチコチでかなり印象が良くなったようだが。

勉強でも校内トップを突っ走る明彦である。まさにどこに出しても恥ずかしくないような生徒だろう。

やらないよりはマシだったかな。最近ちょっと思うようになったが、それでもやっぱり早く辞めたい。ため息をつくことが多くなったように思う。

目指すことでないことをやらされていると思うからだろう。

その日も、いつものように練習を終え、着替えて出てきたところを顧問の教師に捕まった。

次の大会も期待しているから、体調に気をつけるよとか言われた。言われなくても気を付けている。早く優勝して辞めたいのだから。体調不良で一度受験に失敗しているので、風邪などには人一倍気をつけるようになっていた。特に大会前は余計だ。

咳のせいで最下位だったなんて結果は目も当てられない。次こそ全国で優勝しなければ。

顧問と別れ、校内を出た。帰り道はすでに暗い。

早く帰って勉強しよう。思いながら足を速めたときだった。

「もう片方の耳もやるよ！ だから！！」

声が出た。奴の声だ。

物騒な単語が聞こえたような気がして、明彦はそちらに足を向けた。

もう片方。

耳。

やる。

どういう意味だ!?

手を繋いだ双子がいる。同じ顔、同じ長さの髪、同じ服、同じ靴。違うのは表情があるかないか。

片方は笑っていた。片方は何の表情も浮かべない。

双子に、少年が叫んでいる。

「もう片方の耳もやるよ！ だから!!」

必死に、少年は叫んでいる。

「あいつと同じくらい……いや、あいつより速く走れるようにしてくれ!!」

最初は勝てると思っていた。自分より下だと思っていた。どれだけ手を抜いて走っていようと、あいつは自分より遅い。

勉強ばかりしているあいつに負けるはずがない。運動神経には自信があつたから。

自分より遅くても、陸上部部員の中では速いだろう。充分戦力になると思ったからしつこく勧誘した。

でも、結果は。

「あいつより速く走りたいんだ!! それが駄目ならあいつを俺より遅くしてくれ!! 陸上部にいらなくなるくらいに!! 足折るなりなんなりしてくれよ!!」

自尊心は吹き飛んだ。勉強だけでなく、あいつは運動も堪能だったのだ。

ずるいと思った。勉強も出来て運動も出来て、自分の望むものを全て持っているあいつ。

羨ましい。妬ましい。誘わなければ良かった。

片方の耳を差し出してまで勧誘したことを、少年は忘れていない。

一年前、少年は双子に言った。

『そつだなあ、要らないトコつていえば耳かなあ。あ、鼓膜じゃな

くて、耳。聞こえなくなったら困るし……本当になつかどうか分からないから、耳の片方かな。それであいつが陸上部に入ってくればいいけど』

一年前、少年は片耳を失った。ひきかえのようにあいつは陸上部に入った。

少年の望みはかなったのだ。
でも。

くすくす。音亜が笑っている。必死な様子の少年を笑っている。

優亜が首をかしげた。可愛らしい顔に表情のないまま。

「貴方のはもう要らない」

宣告のように言う。

「駄目だったから、要らない」

「ダメ？ ダメだったって、何が!? 何で!」

少年の声に、笑いながら音亜が告げる。

「だって、駄目だったんだもの。だから、要らないの」

くすくす。楽しそうに笑いながら。無表情な優亜と手を繋ぎながら。

「ばいばい」

「ばいばい」

さよならと、双子は言う。

「ま、待ってくれよ、頼むよ! なあ!」

びゅう。勢いよく風が吹き、目をつぶった一瞬に双子の姿が消える。

「待ってくれよあつ!」

答える声はない……。

どういふことだ。

今聞いたことは何だ。

明彦は壁に背を預け、地面を睨みつけるようにうつむいた。
あの双子。見覚えがある。わけの分からないことを明彦に言っ
てきた双子だ。

奴と知り合ってたのか？ そのわりには会話がおかしかったよ
うな気がする。

耳。もう片方もやると言った奴。要らないと言った双子。

何を言っているんだ？ 奴の耳は事故でなくなった。爆発事故で
落ちてきた蛍光灯でちぎり飛ばされたはず。

そうだ、奴は明彦をかばって蛍光灯を頭に。

血まみれになった奴を見ている。ずっと上着で傷を抑えてやって
いたのは明彦だ。

思い返して、ハツとした。

右耳。

血まみれだった顔。抑えていた自分。血のしみこむ感触まで覚え
ている。

明確に覚えている。抑えていたのは奴の右側頭部。手に当たる感
触は、確かに耳だった。

あのとき、奴の頭には耳がついていたのだ。

でも、退院してきた奴は言っていなかったか？

『病院で先生が度肝抜いてたさ。千切れてるーって』
病院で切断されたのではないのか。

では、あつたはずの耳はいつ、どこで千切れたのだろう？

救急車の中か？ それとも乗る前か？ 救急隊員が来て、明彦の
手が離れるまでは、確かに奴の耳はついていたはず。

「貰ったの」

声に明彦はハツとして振り返った。

式・アスリート〜狂想曲（カプリッチオ）・5

同じ顔の少女たちがいる。先程どこかへ行ったと思っていた彼女たちは、明彦の目の前に佇んでいる。

「あの男の子の耳、貰ったの」

無表情に、優亜は言う。

「あの男の子の耳を貰う代わりに、貴方を『りくじょうぶ』に入れるようにしたの」

言いながら、明彦を見上げる。

「でも、駄目だったの。あの男の子の耳じゃ、駄目だった」

「もう片方くれるって言ったけど、もう要らない。だってあの男の子のじゃ駄目だって分かったから」

にこやかに、音亜が言う。

意味が、分からない。分からないのに、無性に腹が立った。

片方の耳。奴が失ったもの。

片方の耳。明彦があきらめた道。

明彦を陸上部に入れるためのお芝居だったというわけか。あの実験事故も、蛍光灯で怪我をしたのも。

こんなわけの分からない双子にまで頼んで、片方の耳を失ってまで。

そうして自分で誘っておきながら、陸上部にいられなくしてくれとまたこの双子に頼んだ。

そうか。そんなに走りたいのか。

自分だけが一番でいたいのか。一番先を走りたいのか。

勝手に走れ。

自分には関係ない。

明彦はそのまま立ち去ろうとした。明日部活を辞めようと思った。これ以上奴に付き合うのは真っ平だと思った。奴は己の考えのままこの一年明彦を引きずりまわした。一年付き合えば充分だろう。

「要らないところはない？」

その背に、かけられた声。同じ顔をした少女のどちらだったのか。それを判別するには振り返らなければ無理だろう。

一年前にかけられた声と同じ内容、同じ声のトーン。

「貴方の身体で、要らないところはない？」

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」

「貴方の望むものをあげるよ。だから頂戴」

一年前と同じ言葉を、同じ顔の双子は投げかけてくる。一年前、明彦は取り合わなかった。

どこの部分も明彦にとつては必要な部分だったからだ。要らないところなどなかったからだ。

「……本当に、おれの望んでいることがかなうのか」

一年前と違い、明彦は双子に振り返った。

「かなうよ。それが貴方の望むカタチとは限らないけれど、かなうよ」

この双子は何なのだろう。神か悪魔か、化け物か。しごく淡々と望みをかなえるから身体はどこかを超越せと言う。身体はどこかが欲しいから、お礼に望みをかなえると言う。

「どうやって？ 奴にしたように事故を起こすのか？」

「さあ」

にこやかに音亜が首をかしげた。明彦は眉を寄せる。望みをかなえると言いながら、『さあ』と言うのはどういうことなのか。双子自身にもわけが分かっていないように思える。

「さあって……あの事故を起こしたのはお前たちなんだろ」

いまだに原因不明の実験室での事故。薬品が混ざったわけでもなく、ガスが出ていたわけでもなく、どこにも責任が見つけられない事故。

担当教師はかなりPTAからつつかれたらしいが、教師が悪いと

いう結論にはならず、結局そのまま水に流れた。

「違うよ」

音亜はにこやかに言い放つ。あの事故は自分たちが仕組んだものではないと。

「でも、そうなるの。あの男の子がそうしたいと望んだから。わたしたちに耳をくれると言ったとき、そう望んだから」

やはり意味が分からない。なのに、どうして彼女たちに身体を要らないところを渡せば望みがかなうと思いはじめているのだろう？

言葉にすればいい。それだけで明彦の望みはかなうと感じているのだろうか？ 言葉にしようと思いはじめている自分が、恐い。明彦は唾を飲み込んだ。ひょっとして、とんでもないものの前にいるのかもしれない。

現実にはありえないような存在の前に。

「分からない。どうしてそうなるんだ？ お前ら、神か悪魔か。常識って知ってるか？」

うふふ。音亜は笑い、優亜は無表情に明彦を見上げている。

「神と悪魔ってどう違うの」

無表情のまま、優亜は言ってきた。

「常識って他とどう違うの。わたしは優亜。こっちは音亜。それだけだよ。そうだよ、音亜」

「そうだよ、おねえちゃん」

双子に返す言葉を明彦は持っていない。常識。神。悪魔。自分で口にしておきながら、それが何なのか明確に知っているわけではないからだ。

皆が皆常識と言う。それすら非常識の波の中にうずもれかけている世の中で、常識はどこにあるのか。

神も悪魔もない。それを断言できるほど世の中を知らない。明彦は未熟だ。

「ねえ、要らないところ、ある？」

「あるのなら、頂戴」

双子が明彦の瞳を見上げている。外灯の光に青く煌めくありえない瞳が明彦を覗き込んでいる。

明彦はその未熟のまま、呑まれた。確固たる自分を持っているつもりだった少年は、ありえないものの前に怒涛のような感情に呑まれてしまう。

足を止めなければ良かった。双子の声に振り返らなければ良かった。

だが、明彦自身がそう思うことはなかったのだ。

「約束、したからね」

「頂戴ね」

「皆瀬」

声がかかる。

かけてきた相手に明彦は笑顔で手を上げる。会つのは何ヶ月ぶりだろう。

「元気だったか」

「おう。お前は相変わらずだな、サル」

「サル言うな。ったく、その毒舌変わってねえよなー、高校のときから」

彼らは成人していた。どちらも大人だ。片方は短距離陸上の国際的スプリンター、片方は大企業のコンサルタント。

どちらも世界をまたに駆ける青年たち。特に奴は忙しく、ついこの間も世界的な大会に出て、昨日戻ってきたばかりだ。帰国して真っ先に明彦に優勝の報告に来た。結果は本人が携帯のメールで送ってきたし、明彦もテレビで見えていて知ってはいたのだが、直接祝っ

て欲しいらしい。いつもそうである。

「優勝おめでとう。世界新まであと少しだな」

「ははは、まあ俺にはこれしか能がないしー」

「本当にな」

「本当に言つな。嘘でもそんなことないよと言えないのか、お前は」

「すまん。正直者なんでな」

「嘘付け」

笑う奴は明彦の背中に回った。そのまま、明彦の座る車椅子を押す。今日はどこかで祝いの食事を取ることになっていた。奴には恋人、明彦には婚約者がいるが、こういうときには女つ気抜きで食事することになっている。

「お前もさー、けっこう足速かったのにな。もったいないよな。ひよっとしたら俺を超える選手になったかもしれないのに」

奴は悪びれなく言つてのけた。その感情がどこから来るものなのか、明彦は知っている。

安堵だ。自分より上の存在がいなくなったことに対する、安堵。

高校二年の夏、大会前に明彦は突然骨折した。秋、難病の宣告を受けた。冬、右足を切断した。

それからは義足か車椅子の生活だ。当然、走ることなどできない。片足で済んでよかったと奴は笑っている。

「そうか、もったいないと思うか？」

「ああ。一緒に世界大会出たかったよ。果てはオリンピックにも」

背中であつた奴に、明彦は薄く笑む。奴はもうすぐ金メダルに手が届くだろう。世界新にも手が届くだろう。

明彦が奴の上にはいないから、奴の望みはかなうのだ。

奴が押す車椅子。

「次の大会、お前見に来ないか？　なんか皆瀬が見に来ると速く走れる気がするんだよなー」

「おれがあの子に望んだからさ」

キツパリと告げた言葉に、車椅子が止まる。

「片足をやるから、お前を世界一のスプリンターにしてくれってな」
言葉が返ってこない。何のことを指しているのか、奴には分かったのだから。

分らないはずがない。奴もあの双子に身体の要らない部分を差し出したのだから。

「聞いたんだよ。おれより速くなりたかったんだろう？ もう片方の耳やるって叫んでたよな。あの日、おれはお前の叫びを聞いたんだ」

人々のざわめきが、目の前を通り過ぎていく。あの日手術で切断された明彦の右足は、双子のもとへいったのだろうか？ 確かめる術はないが、きつと双子は明彦の足を手に入れただろう。あの片足を何のために使うのかは知らないし、知るつもりもない。

「世界一になるんだろう？ なれよ。誰よりも速く走って走って走り続けるよ？ お前がおれを陸上部に入れるために片耳をなくしたように、おれはお前が世界一になれるように片足を賭けたんだからな」

明彦の目的は果たされたのだから。

「な、なんの、ことだよ」

奴の声が震えている。

「なんのことだろうな？ 本当に、何のことだろうな」

奴の実力ではない。奴は自分の実力でそこまで昇りつめたつもりなんだろうが、そうじゃない。

奴のせいで明彦は行きたい道に進めなかった。陸上部に入る羽目になった。

したいことは他にもあったのに、それが許さない状況を作り上げ、奴は明彦を陸上部に入れたのだ。

そして自分勝手に望みをかなえようとしていた。明彦に抜かれたことが悔しくて、明彦を陥れようとした。
ならば。

意趣返しをしてやろうと思ってもいいだろう？

「どうした？ わけの分からない話だぞ。いつもみたいに笑い飛ばせよ。冗談さ」

薄く笑み、明彦は背後の奴を見上げた。蒼白の顔色の奴は、いつもどこかに浮かべている明彦への安堵を忘れている。

「次の大会、楽しみにしてるぞ。応援に来いと言うなら行ってやるさ。それでお前が速く走れると言うならな。シンユウだろう？」

世界一になれよ。明彦は笑う。

奴が右耳をなくしてどれだけ罪悪感に駆られただろう。どれだけ憔悴しただろう。償いのために奴の望みに乗ってやろうと思った。だから陸上部に入った。

その罪悪感さえ、奴の手のひらの上だったことに一年後、気が付いた。

「なあ、今日はどこに飯を食いに行く？ お前この間上手い店見つけたってメールして来たよな。そこに行くか？」

「あ、ああ……」

震える声が、伝えてきた。

分かっている。明確に理解している。

奴に反論することは出来ない。最初に卑怯な望みをかけたのは奴のほうだからだ。

友人を名乗りながら明彦の足が折れることを望んだのだから。自分より遅くなることを望んだ卑怯者。

明彦は笑っている。片足を失ったことで明彦は自分が望んだレールの上に戻れた。学業に専念することが出来たのだ。

明彦の望みはかない、奴の望みももうすぐかなう。だが、それは明彦の片足を犠牲にした望みだ……。

街の喧騒の中、車椅子の青年とその車椅子を押す青年がいる。

右足のない青年と、右耳のない青年。

同じ右側を失っている二人。

組曲～移し身の双子～

片方はコンサルタント業。片方はスプリンター。

どちらも世界をまたに駆ける青年。

だが。

右耳のない青年は右足のない青年の手のひらで走っているのだ。

彼の奏でたカプリッチオの中で、踊り続けることになると、彼は
感じている。

式・アスリート〜狂想曲（カプリッチオ）・5（後書き）

二章が終了しました。『自分勝手さ』を書いてみたかっただのですが、いかがだったでしょうか？人間の心は綺麗で、でも怖いものだと思います。

参・ホスピタル〜夜想曲（ノクターン）・1

朝。

目を開ける。閉じられたカーテンの隙間からの日の光を、ベッドの上から眺め、彼女は安堵の息をついた。

今日もまだ生きている。

白いベッドに起き上がる。枕もシーツも毛布にかけられているカパーも白。

自分の腕も白。そこから繋がる点滴の管は、薬液の色をしている。彼女は自分の胸元に手を当てた。

手は動く。足も動く。息をしている。心臓は動いている。今日もまだ生きている。

神様ありがとう。わたしはまだ生きています。ベッドの頭にはプレートがついている。

彼女の名前と生年月日が刻まれたプレート。生年月日から彼女の年齢は十二歳と知れた。小学校か中学校に行

っている年頃の少女だ。

彼女はベッドから降り、枝になる果実のように垂れ下がっている点滴を引きずって、窓に近寄った。カーテンをゆっくりと開ける。

朝の光はまぶしくて、彼女は目を細める。窓の外の植木に小鳥がとまっているのが見えた。

毎朝の風景。この小さな窓から見えるもの。それが彼女の全てだ。

外へ出たいと思ったことはない。出ても誰かの迷惑になるだけだと思っっている。

少し冷たい風に当たただけで熱を出す身体。

生まれつきに重い病気を持つ身体。病室からは出られない身体。彼女は毎朝、生きていることに感謝する。

まだ死んでいないとホッとす。

いつどうなつてもおかしくないと思う。たまに見舞いに来る家族は何も言わないけれど、本人には分かっている。すぐに倒れてしまふくらいにこの身体は弱いから。可愛らしいパジャマに包まれた手足は細く、今にも折れそうなくらいだ。

細い両手を祈るように組み合わせて、彼女は目を閉じる。
明日も生きていられますように。

朝。

目を開ける。閉じられたカーテンの隙間からの日の光を、忌々しげに見つめて、彼は息をついた。

つまらない一日が始まる。

入院なんかするもんじゃない。身を起こして頭を掻いた。彼のベツドの頭にはプレート。

あおやま 青山 かずこ 和人。彼の名前と生年月日。年は二十三歳。

彼は病気ではない。もうシーズンも終わるといふのに、屋内スキー場で足を折ってしまってそのまま入院。スキー場でナンパした綺麗な彼女は素敵に薄情だったようで、足を折った彼を見てそのままUターン。ほかの男と行ってしまった。

全くついてない。ギプスで固められた自分の足を見下ろして、和人は肩を落とした。

あそこで転ばなければ、今頃は綺麗な彼女とイロイロと仲良くなくていたはずなのに。

本当についてない。

「おはようございます、青山さん」

検温ですと看護師が入ってきた。まず先にカーテンを開けて日の光を室内に入れてから、体温計を手渡され、和人は素直に脇に挟み、脈拍を測られる。

毎朝の決まりごとだ。

つまらない一日の始まりを告げる、目覚ましのように。

「カンゴフさん、退院したいよ。出して。ヒマ」

愚痴を言っただけをこねてみるもの、

「気持ちばかりですけれどね、もう少し我慢してくださいね。今は安静が必要です」

暇をもてあましている患者には慣れている看護師にあっさりと受け流される。

「そんなにヒマなら松葉杖で歩いてみます？ 院内の散歩くらいは

大丈夫ですよ」

「退院したいな」

「まだダメです」

にこりと微笑む看護師に、音を立てた体温計を渡す。骨折による発熱はもう治まっていた。

「散歩してきたらどうです？ 気分転換になりますよ。あとで松葉杖持ってきてますね」

変わりばえしない病院内を散歩してみたらと言われても、あまり嬉しくなかった。

夜。

等しく訪れる眠りの時間。部屋も廊下も静まり返っていて、昼間の人の気配はどこにもない。しんとした、静寂の世界だ。

そんな中、和人は松葉杖について病室を抜け出していた。

大体消灯時間が早すぎる。健康な若い男がこんな早くに寝られるものか。病院の食事は美味しくないし、なによりもヒマだ。

ちよつと抜け出してラーメンでも食べてこよう。そんなことを考えていた。

どこから抜け出しているのかわからなかったもので、とりあえず正面玄関に向かってみたが、案の定閉まっている。診療時間も面会時間もとうに過ぎているのだから当然だ。入院なんて人生初めてで、

勝手が分からないが、やはり裏口から抜け出すべきなのだろう。

で、病院の裏口というのはどこら辺にあるのだろうか？

見取り図にでも載っているものだろうか。院内の見取り図を探してみようと夜間の病院をうろつろしてみよう。初めての入院の上に、けっこう広い総合病院なので見当がつかない。病院にかかったこともほとんどないのだ。入院から脱走まで初めての経験である。

見取り図とか地図のようなものは、大抵入り口の近くにあるはずだと予想をつけて、そのあたりを探してみる。これかなあと思う案内図を見つければ、裏口を探してみる。

それっぽいものは反対側の方向にあるようだ。

よしラーメンだと意気込んで、慣れない松葉杖でつかえつかえ歩いてしばらく。

ここが裏口に通じる道！と曲がったところは行き止まりだった。脇にはあまり聞いた事のない検査室らしい部屋がある。

どうやらどこかで曲がるところを間違えたらしい。

「……迷路かつ」

どうしてこんなにややこしい造りなのだろう。方向音痴ではないはずだから、院内が複雑に入り組んでいるとしか思えない。

どこで間違えたのか。とにかく戻って確認してみるしかない。またあの案内図のところまで行かなくてはならないのか。

面倒くさくなってきたが、ラーメンは食べたい。結局食欲に負け、案内図のところまで戻ることにした。

時々転びそうになりながらなんとか中間の距離くらいに戻ったときだった。

ふわり。

白い影が。

「……」

視界の隅を横切ったような気がして、和人は足を止めた。

「……病院、だっけな、ここ」

思わず呟いた。

びょういん。それはもう、ここぞとばかりに怪談が溢れて湧き出しそうな場所である。

バーゲンセールが出来そうなくらい、そのテの話は多いだろう。だからと言って自分が体験するのはごめんだ。聞いて誰かと騒ぐのは良くても、体験談になるのはまっぴらである。和人は見なかったことにした。そのまま案内図のところまで戻ろうと必死に松葉杖を動かす。病室に戻ったほうがいいような気がするが、ラーメンは食べたい。

今のところ明確に目撃したわけではないので、恐怖心より食欲が勝っている。

とつとと裏口にたどり着いて、ラーメンを。

「お兄さん、どこ行くの？」

かけられた細い声に、心臓が止まった。硬直した和人に、さらに声は続く。

「消灯時間、過ぎてるよ。カンゴフさんに見つかったら、怒られるよ」

ぺた、ぺた、ぺた。スリッパの音が近寄ってくる。

……スリッパ？ 和人は恐る恐る振り返ってみた。

夜に浮かび上がる白いパジャマを着た少女が、不思議そうな表情で和人を見ている。

足はある。別に透けていることもない。生身の人間に見えた。小学生か中学生か、ちよつと判断はつきかねたが、子供だということに変わりはない。

ただ、生気は薄い。元氣そうにはとても見えなかった。入院患者だとすれば無理もないことなのだが。

「どうしたの？」

きょとんと少女は話しかけてきた。

「……び、びつくりした」

やっと声が出て、そう言うことができた。

「いきなり声掛けられたから、なにかと……」

組曲～移し身の双子～

言つと、少女は納得したようだ。生氣薄い顔に花のような笑顔が
浮かぶ。

散る寸前の、小さな花のように。

組曲～移し身の双子～

参・ホスピタル〜夜想曲（ノクターン）・1（後書き）

ここから第三章です。退屈な夜を過ごす青年と少女のお話。

参・ホスピタル〜夜想曲（ノクターン）・2

「あはは、お化けじゃないよ。わたしもここの五階に入院してるの。おにいさんも入院してるんでしょ？ 足、痛そう」

ギプスに包まれた足に視線を移して、少女は言う。

「え、あ、いや、まあ、痛いけど……痛くないよ」

自分でも何を言っているのかよく分からない。相当あわてている。折れちゃったの？」

「あー、スキーでね。うっかり転んで、ポツキリ」

「大変そうだね、松葉杖」

「慣れてないからね、さつきも転びそうになったし」

何でこんな話をしているのだろう。しかもうす暗い院内で、知らない少女と。

幽霊みたいに生気ない少女。

そういえばこの少女こそ何をしているのだろう。

「え、っと、何してるのかな、君は？ 消灯時間過ぎてるよね？」

うっかり看護師に密告でもされたら大変である。あとで怒られること間違いない。早くこの少女をやり過ごして脱走したかった。

「ジュース買いに来たの」

少女はあっさりと答えた。手には小銭入れらしい可愛い犬の絵柄が見えている。

言われてみればこの階には自販機があるはずだ。飲み物を買いに来た入院患者とたまたま会っただけのことで、不思議は何もない。勘違いして硬直した自分が馬鹿みたいである。

「おにいさんは？」

あどけない視線が見上げてくる。咄嗟に答えた。

「う、いやいや、おれもジュース買いに来たんだ」

「あっち、自販機ないよ？」

示された方向にあるのは正面玄関だけである。

「迷っちゃったの？」

「……うん」

もう、こう言うしかないだろう。

「こっちだよ」

少女は和人の松葉杖をツンツンとつついた。ふわりと反転して道案内をしてくれるつもりのようなようだ。仕方なく、ついていった。看護師に密告されるよりはマシだろう。

少女はどうやら和人よりもずっと院内のことに詳しいようで、足取りには迷いが無い。入院して長いのかもしれない。

「おにいさん、なんだか変な方向に歩いて行くからどうしたのかなと思ったの。気分でも悪いのかと思ったんだけど、道に迷っちゃってたんだね」

ふらふらと歩いている和人を心配して声をかけてくれたらしい。なかなかいい子である。

後ろをついていって、自販機が設置されている一画にまでたどり着いてしまった。仕方なくスポーツドリンクを一本買う。

慣れない松葉杖で歩き回って少し疲れたので、一度休憩することにした。その辺の椅子に座ると、何故だかオレンジジュースを買った少女も隣に座ってくる。

ジュースを買ったらそれでもうこの子は自分の病室に戻ると思ったのだが。

「戻らないのかい？」

「おにいさん、また迷っちゃわない？ 平気？」

どうやら、和人を心配してくれているようだ。迂闊に道に迷ったなどと言ってしまったことを少し後悔した和人である。いい子なのだが、脱走してラーメン食おうとしている身としては、ちょっとうっとおしい。

「いや、もう大丈夫だよ。道分かったし」

「そう？」

小首をかしげる様子は、可愛らしかった。夜間の病院で出会った

のでなければ、第一印象はさぞ可愛らしい子供だっただろうと思う。
将来はかなりの美人になりそうだ。

「大丈夫大丈夫。おにいさん、大人だから」

「うん、分かった」

にこやかに微笑み、少女は立ち上がった。

「おやすみなさい」

「お、おやすみ」

ぎこちなく微笑みを返し、和人は少女を見送った。

姿が見えなくなってから、ようやく息をつく。買ったスポーツ

リンクをあけ、口にする。

あんなにいい子を幽霊と思った自分がなんだかおかしかった。

少女のパジャマも白かったので余計に幽霊に見えたのだが、怯えすぎだろう。

「さーて、ラーメン食いに行くか」

飲み干した缶を近くのゴミ箱に捨てて、和人はめげずに松葉杖にすがつた。

夜。

最初の脱走が上手くいったのに味をしめ、和人は再びの脱走を企てた。近くに屋台のラーメン屋が来ていて、けっこう美味かったのでまた食べたくなったのだ。病院食は味気ないので数日で飽きてしまっていた。

ラーメン屋の親父は三日にいつぺんの割合で同じ場所に来ると言っていたので、今夜あたりまた来ているだろう。

和人のパジャマ姿とギプスを見て苦笑していた親父によると、けっこう脱走患者は多いらしい。やはり病院食ばかり食べていると濃い味が恋しくなるようで、そのときもお仲間が一人いた。バイクの事故で怪我をしたというおっさんだった。包帯を巻いたおっさんとギプスをした和人は一緒にラーメンをすすったのだ（和人より先に

来ていたおっさんは食べるなりさつさと先に去った。バレたらマズイからだろう)。

近くにはコンビニもあるのですが、もしラーメン屋がいなくてもそこに寄って何か買ってくればいい。

そこまで考えて病室を出る。

松葉杖にも大分慣れた。足取りはこの間よりもかなり速い。

夜間のナースステーションを見つからないように通り過ぎ、エレベーターへ。

ナースステーションさえやり過ごせば脱走は成功したも同然である。あとは夜間の見回りが来る前に病室に戻ればいい。

チン。軽い音がしてドアが開いた。

「あ」

「あ」

そこにいた人物に思わず声が出る。初回脱走の晩に出会った少女だ。彼女は今日も白いパジャマを着ていた。

「こんばんは、おにいさん」

「こんばんは」

あいさつし返して、とりあえずエレベーターに乗り込む。下に行くエレベーターはこれが一番速く来た。他は上へ行くのや、上の階で誰か乗り込んでいるのか、とろとろ降りてくるのだけだったのだ。「今日もジュース買いに行くの?」

少女は何気なく話しかけてくる。彼女の手にはこの間と同じ小銭入れが見えた。

「え、あ、うん。まあ。君もかい?」

「うん。今日はアップルジュース買おうかなと思って」

「へえ、果物好きなんだね」

短く会話したとき、エレベーターは自販機と裏口のある階についた。ここから自販機のある一画と裏口は真逆の方向である。脱走するためには少女と逆方向に歩かねばならない。

また一旦少女と同じく自販機まで行って、そこで別れたほうがい

いだろうか。

「必要ないジューズをいちいち買うのも阿呆くさい。

「おにいさん、行かないの？」

少女は和人が来るのを待っていてくれる。とりあえずエレベーターからは降りたものの、

「いや、えーっと」

どうしよう。ついていってごまかすべきか。迷う和人の横でほかのエレベーターが開いた。

誰か降りてきたらしい。見たことのない男だ。三十歳前後といったところか。

「あ、おじさん」

少女の知り合いらしい。彼女は男を見て苦笑している。男は少女を見てありゃ、と呟き頭を掻いた。

「また抜け出すの？」

「見つかったか。いや、そろそろラーメン屋が来る日かなと思ってる」

「カンゴフさんに見つかっても知らないよ」

茶化すように彼女は笑った。よく分かっているというような態度だ。

「内緒、内緒。頼むわ」

彼女に拜むように手を合わせて笑いかけ、男は行ってしまった裏口のほうへ。

「……あの人」

呟く和人に、少女は楽しそうに笑いながら答える。

「近くにね、美味しいラーメン屋さんが来るんだって。いろんな人が抜け出して食べに行ってるの。おにいさんもそのうち行ってみるといいよ。すっごく美味しいんだって」

脱走、黙認。いや、彼女も共犯か。

密告されるとかنگるより、正直に話したほうが早かったようだ。「いや、おにいさんももう行ってみたんだよね、実は」

「そうなの？」

「……この間、本当は脱走しようとしてたんだ」
正直に白状する。道に迷ったのは本当だが。

「で、今も脱走しようかと思ってた。そこを君に見つかったからま
ずいなーっと」

「あはは、わたしカンゴフさんに言ったりしないよ？」

慣れているのか彼女は笑っている。別に怒ったりもしていないよ
うだ。

「そっか、心配しすぎだな」

笑って和人は敬礼の真似をした。

「では、脱走してきます。あ、君も行く？」

一応誘ってみる。夜の脱走に子供を誘うのはどうかとも思ったが、
ひよっとしてこの子も脱走の常習犯なのではないのかと思ったのだ。

少女は笑って首を振った。

「ジューズで我慢する。ありがと、おにいさん。行ってらっしゃい。
気をつけて」

参・ホスピタル〜夜想曲（ノクターン）・3

脱走した悪い大人たちはラーメン屋で合流した。和人より先にラーメン屋にたどり着いていたあの男は、和人を見てよおと手を上げる。

ども、と挨拶を返して和人も横に座る。屋台のため座席がそう広くないのだ。つめて座ってくれとラーメン屋の親父にも言われている。

「ひよつとして常習犯ですか？」

「まあね。このラーメン美味いから」

男とそんな会話をして、ラーメンをすすっているうちに、あの少女の話になった。

あの子もよく脱走するのかと和人は冗談半分で訊いた。

男はいやと首を振った。

「あの子はなんだか難しい病気らしくてね、生まれたときから病院から出られないんだと。脱走なんて夢の話だよ。夜ああやってジューズ買いに行くたびに、俺みたいな脱走犯に会って笑ってた」

男は少しだけ悲しげに続ける。

「外の話してやると喜ぶんだよなあ、遊びに行きたい年頃だろうにさ……小生意気な最近のガキと違って可愛いもんだ。俺らみたいな脱走常習犯の間ではアイドルだよ。あんなにいい子なのになあ……神様ってやつは残酷だ」

しみりと、男は言う。

和人は思い返していた。

一緒に行く？ と訊いたとき、少女は笑っていた。面白そうに笑っていたのに。

「外に、出られないんですか、あの子……」

白いパジャマ。生気感じられない細く小さな女の子。

笑っていた。行ってらっしゃいと。気をつけてと言って送り出し

てくれた少女。

たった二回会っただけの少女。

楽しそうに、笑うのに。

「にいちゃんもさ、あの子に会ったら、外の話してやんなよ。凄く喜ぶんだ。それがどんなにくだらない話でも、あの子には楽しいんだろうな。な、頼むよ。俺もうすぐ退院なんだ、あの子に話してやれるのも、あともう少しの間だけだからよ」

男は和人に拝むように手を合わせた。

昼。

売店に雑誌を買いに来た和人の視界に、白いパジャマ。彼女は興味深そうにお菓子の棚を覗き込んでいる。何を買つか悩んでいるようだった。手にはあの小銭入れを持っている。

そのうちに少女は手にとっているいろと見定め始めた。真剣な表情が見えていて面白い。

高くても数百円の買い物。それでも彼女くらいの年頃には大金なのだろう。

あんな年頃が自分にもあったなあ。そんなことを考えて和人は雑誌を持ってレジに向かった。

「あ、おにいさん」

精算していると背後から声がかかった。何を買つか決めたらしい。小さな小箱のようなお菓子を手にして、彼女が立っている。

「こんにちは」

「あ、こんにちは」

ちゃんと挨拶が出来る子だ。

「お菓子買つのかい？」

「うん。おにいさんは本買ったの？」

少女はお菓子をレジのおばさんに渡し、それから和人を見た。

「おにいさん、わたし本持ってあげるよ。松葉杖で荷物持つの大変

でしょ？」

確かに手は塞がってしまったている。持てないことはないが、面倒ではあった。

昨夜の男の声がよぎった。難しい病気。外にも出られない少女。

「大丈夫だよ」

やんわりと断る。身体の弱い少女に荷物を持たせたくなかった。

それが軽い雑誌でも、だ。

「いいの、持ってあげる。おにいさん足痛いんだし」

会計を済ませ、彼女は和人の手にしている雑誌を引っ張った。今にも落としそうだったそれはあっけなく少女の手に収まってしまふ。松葉杖のほうに神経がいつているため、抵抗できなかった。

「あ、大丈夫だって」

「いいの。おにいさん、どこの部屋？」

結局、彼女は部屋まで雑誌を持ってきてくれた。病室まで一緒に歩いて、窓から射す日の光の中で少女の姿を見たとき、真っ白いパジャマの彼女は冗談でなくそのまま日の光に溶けてしまいそうに見えた。

恋でなく、愛でもなく、淡く儂く、ただ、そこにあるもの。

かなうはずもない。

それでも。

だからこそ。

夜。

今夜も抜け出して何か食べてくるつもりでいたところを、やはりいつものようにジュースを買いに来た少女とばったり会った。

昼間も売店で何度か会い、その度にその辺の椅子に座って話をし、和人はすっかり少女と打ち解けていた。いつかの男が言ったとおり、少女は本当にたわいもない話で喜んだ。

屋内スキー場で転んで骨を折ったと言ったとき、屋内でスキーが出来るのを目を丸くしていたくらいだ。本当に外のことを知らないのだろう。訊いてみるとテレビもあまり見ないのだという。昼はもっぱら家族の持ってきてくれる本を読んでいるとのこと。

世間知らずもいいところだ。気の毒だと思う。世の中にはくだらないことばかりする連中が山ほどいるのに、こんなにいい子がこんなに窮屈な思いをしているなんて。

外を見せてあげたいと思うのは偽善だろうか。少しでも少女に楽しい思いをしてもらいたいと思うのは、罪だろうか。

「初めて見たとき幽霊かと思ったよ。白いものがすうーっとよぎったから」

「あははは、お化けみたいだった？」

「話しかけられてなおビックリした。小さい声だったし」

「だって夜だもん。大きな声出したらカングフさん来ちゃうよ」

話しているとほかの脱走患者も混ざってきた。少女は本当に夜の悪い大人の間でアイドルらしい。

たわいもない話をした。本当にたわいもない話ばかりだった。

馬鹿みたいに笑って、看護師に見つかったこともある。少女と一緒だったことで、大の大人が子供に夜更かしさせるなんて、と、こっぴどく怒られた。

それも次の日の夜には笑い話になっていた。

たわいもない話だ。どこにでもある、そんな話。

昼。

ざわざわざわ。売店のそばはいつも混雑している。通れないくらいではないが、入院患者だけではなく通院の患者も買い物に来るた

め、昼間は驚くくらいに人が多い。

その中に、白いパジャマ。

ああ、あの子だと和人はすぐに気がついた。いつも白いパジャマを着ているから、すぐ分かる。

少女は誰かと話していた。相手はパジャマ姿ではない。通院の患者だろうか。一目で双子と分かるくらいに同じ顔をしている少女たちと話している。

同じ顔、同じ服、同じ髪型。

手を繋いだ、双子。

「わたし、音亜」

にこやかに、片方が言う。

「こっちは優亜。おねえちゃんなの」

「要らないところはない？」

無表情に、片方が言う。

「貴女の身体で、要らないところはない？」

口々に、双子は言う。

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」

「あなたの望むものをあげるよ。だから頂戴」

双子の声に、少女は首をかしげる。

「わたしの身体、ポンコツだよ。ほしいの？」

病気に犯された身体。外に出ることもままならない身体。そんなものが欲しいのかと、少女は首をかしげる。

「要らないところがあるのなら、欲しいの」

無表情に優亜は言う。

「うーん、要らないところ……病気の身体全部かなあ」

そこまで答えて、少女は再び首をかしげ、疑問に思ったことを素直に口にする。

「ねえ、要らないところをもらって何をするの？」

重い病気の少女の身体さえ欲しいという双子。貰って一体何を
するのか。

「造るの」

「にこやかに、音亜が言う。」

「何を？」

無邪気に少女が問う。

「わたしたちを」

双子は声を揃えた。

少女に意味は伝わらない。よく理解できないと言いたげに、瞳を
ぱちくりと瞬かせている。

造るといったその意味が、分からない。

身体のをらない部分を欲しがる意味が分からない。

それで望みがかなうのかどうかも分からない。

でも、望みが本当になうのなら……。

参・ホスピタル〜夜想曲（ノクターン）・4

「約束、したからね」

「頂戴ね」

和人の目の前で、双子は少女の肩を撫でた。何を約束したのだろう。会話は遠くて聞き取れなかった。和人に聞き取れたのは会話の終わり際の二言だけである。

双子は片方が笑い、片方は無表情のまま人並みにまぎれてしまう。
「友達かい？」

声をかけると少女が和人を見上げて笑顔になった。

「こんにちは、おにいさん」

「こんにちは。今の、お友達？」

「ううん。今話しかけられたばかり。なんだか不思議なおねえさんたちだったよ」

彼女の友人ではないらしい。今話しかけられたということは、親しい知り合いが見舞いに来たというのでもない。

「なにを約束したんだい？」

頂戴。そのひとことが耳に焼き付いている。

どうしてなのかわからない。でも、あまり良くないことのような気がする。もしかして金銭や何かを要求されていたのかと、そんなことをふと感じた。

「うーん、よく分かんない」

少女は首をかしげている。この様子では何かを脅し取られたとかそんな物騒なことではないようだ。あの双子もそんなにガラの悪そうな感じはしなかった。

でも、胸騒ぎがするのは何故だろう。

落ち着かない。

「あのさ、今度あの二人が来たら、誰か大人を呼ぶんだよ。おれでもほかの人でもいい。カンゴフさんでもいいから、とにかくひとり

で話しちゃだめだ」

「悪い人なの？ あのおねえさんたち」

「いや、それは分からないけど……でもなんか……なんか分からないけど、とにかくだめだ。いいね」

少女を説得できる材料などない。こんな曖昧な言葉で彼女が分かってくれるかどうか分からないけれど、とにかく、あの双子に会わせてはだめだ。

何故そんな風に思うのか分からないまま、和人はとにかく双子には会うなと言いつけた。

意味があるのかないのか、自分でも分からないまま。

夜。

和人の退院が近付いていた。もともと単純な骨折である。完治するまでにはそれなりに時間がかかるが、ずっと入院するほどの怪我ではない。ギプスさえしていれば日常生活は可能なのだから。

退院。最初はあれほど早く退院したいと思っていたはずだ。

速く退院させると看護師に駄々までこねた。

が、今はあまり退院したいと思わない。多分、少女のことが気になっっているからだろう。

この短い時間で、和人は少女のことをすっかり妹のように思っていた。

少女と話をするのが楽しいというのもあるだろう。ほかの脱走患者たちも、それで退院することを惜しんでしまっているのだ。

退屈な入院生活に、一筋の楽しみを与えてくれた少女。

次々と退院していなくなる患者と違って、彼女は病院から出られない。この先ずっと出ることもない。

外を知らない、小さな少女。

「おにいさん、もうすぐ退院するんでしょ？ 良かったね」

少女はにこやかに言ってくれる。外に出られない悲壮感など彼女

には見受けられない。

「あ、うん。そうだね」

頷き、和人はいたたまれなくなる。これは小さな同情だろう。必死に闘病している彼女に対して、失礼なくらいの同情かもしれない。ちっぽけな心配だ。赤の他人が向けるもの。この先退院したら、少女とは二度と会わなくなる可能性が高いというのに。

「お見舞い、来るよ」

思わず言っていた。小さな彼女の笑顔を曇らせたくなくて。

「ほんと？」

彼女は嬉しそうに笑った。本当に本当に嬉しそうに笑った。

「来るよ。どうせ足の診察受けに来るし。ギプス外すにも病院に来ないとならないし」

重く考えてほしくない。でもついだと思われるのもイヤだ。

喜んで欲しい。そう思うのは確かなのに、あまり期待されても応えられないと思う自分がいる。

卑怯だな。苦く思った。

少女は笑っていた。本当に来てくれるのと訊き返しもしない。信じているのか、それともただの挨拶と割り切っているのか。

『外へ出たいと思ったことはないの？』

以前ひとりの退院間近の脱走患者が少女に訊いたことがあった。

即座にほかの患者に押さえ込まれて口を塞がれていた。そんな残酷なことを訊くなど、皆が思った瞬間だった。

けれど少女はにこやかに言ったのだ。

『ないよお。倒れちゃうもん』

儂い笑顔のまま、残酷な問いに平然と答えた。

真っ白な彼女。

「なにか欲しいものとかある？ おれのできる範囲なら持つてくるよ。あんまり高いものは無理だけど。最新のゲームとか言われたら勘弁してくれって泣いて謝る」

「あははは、んとね、タンポポほしい！」

身を乗り出すようにして、少女はそう願った。

「タンポポ？ 花の？ 道端に咲いてる？」

「うん、そう！ 道に咲いてるタンポポ！」

「そんなんでいいの？」

「うん！ 触ってみたいの！」

道端に咲く小さな花を、小さな女の子は願った。病院の窓から見える景色で、春先に見る小さな黄色い花に、触ってみたいと。

花の香りを嗅いでみたいと。

「分かった。たくさん摘んでくるよ」

「ちよつとでいいよ。あんまり取っちゃうとかわいそうだから」

「んじゃ十本くらい」

「うーん、五本くらい。ほんとは一本でもいいんだけど」

タンポポ。必ず摘んでこようと和人は思った。こんな小さな約束くらい護ってやろうと。

大人なのだから、子供のささやかな願いくらいはかなえてやりたかった。

夜。夜。夜。

幾度かの夜が過ぎ、退院の日が来た。

迎えに来たタクシーに荷物を載せ、それから和人は病院の窓を見上げた。

少女が入院している部屋は五階。正面玄関からは見えない場所だ。でも、見上げた。

彼女の姿は見えない。当たり前だ。ここからは見えない場所に彼女の病室はある。

見送りには来られない。昨夜から熱を出しているらしいと看護師に聞いた。

あまり具合が良くないのだろうか。

約束のタンポポは早く持ってきたほうがいいのかもれない。

少女が少しでも元気になるように。

夜。

混濁していく意識の中で、確かに聞いた。

「約束、したからね」

「頂戴ね」

いいよ、あげる。

あげるから、お願い。

「かなうよ。それが貴女の望むカタチとは限らないけれど、かなうよ」

よかった。

なら、よかった。

ほんとに、よかった……。

昼。

五本のタンポポと、可愛らしい小さな花束を花屋で買って、和人は病院を訪れた。

五階の彼女の病室に、少女の名前はなくなっている。

どうして。

そばにいた看護師を捕まえた。どこか違う病室に移動したのかと。いいえ。看護師は首を振る。そして和人は彼女との約束を果たせないと知った。

小さく細い、白い少女はもういない。

五本のタンポポ。あんなささやかな願いすら、自分はかなえてやれなかった。

永遠に果たされることのない約束は、棘となって心に刺さった。

夜と昼。

退屈な夜を、窮屈な昼を、たった一人の少女が変えてくれたのに。妹のように思っていた彼女に、何もしてやれなかった。

ちんけでちつぽけで薄っぺらく失礼な同情が、まるで少女を食ってしまったかのような錯覚に捕らわれる。

彼女がいなくなってしまうたのは和人のせいではない。少女の身体に巣食っていた病魔のせいだ。

それでも、納得は出来ない。あんなにいい子だったのに。とてもいい子だったのに。

簡単に人の手が届かない場所までさらわれてしまった。

渡す相手のいなくなった黄色い花と小さな花束。

抱えたまま病院を後にした。花をどうしよう。持って帰る気はない。でも、捨てるのもなんだかイヤだった。一番いいのは少女の眠る場所に供えることだろうが、あいにくとその場所を知らないし、知る術もない。

少女とは仲良しだったが、彼女の身内を誰も知らなかった。親とでも会っていれば、少女の眠る場所を知る手段もあっただろうが。

「おにいさん」

声が、した。

いつ現れたのか。和人の前に、双子が立っている。

にこやかに、無表情に、二人の女の子が立っている。

あの時あの子に話しかけていた双子。

「夜、おいで」

にこやかに。

「夜、おいでよ」

無表情に。

彼女たちは声を揃えた。

「タンポポ持って、夜においで。あの子、待ってるって言ってた

組曲～移し身の双子～

よ
「

それだけを言って、双子は歩いて行ってしまった。

言葉が、何を意味するのか。あの子はもういないのに。
どこを捜しても、いないのだ……。。

参・ホスピタル〜夜想曲（ノクターン）・5

夜。

昼に摘んだタンポポはしおれている。買った花束は、花屋が気を利かせて切り口に濡れた新聞紙を巻いてくれたので、まだ生き生きとしていた。

しおれたタンポポと、生き生きとしている花束を持って、和人は病院の裏口にいた。

どうしてここにいいのか分からない。昼、双子の声を聞いてから、どこでどう時間を潰したのかも覚えていない。

ただ、気がついたらここにいた。

何をしているんだらう。そんなことを思う。こんな花など意味がない。

もう何の意味もない。

どこにも手向けられることのなくなった花束など捨てようと思った。

顔を上げ、裏口を見る。ここから何度も抜け出した。少女に見送られて抜け出したこともある。彼女はいつも笑っていた。楽しそうに笑って送り出してくれた。

行ってらっしゃい。気をつけて。

声を忘れてしまいそうだ。あんなに話したのに、たった数日会わなかっただけで忘れてしまいそうだ。

いずれ、顔も忘れてしまうのか。いや、その存在すら忘れてしまいかもしれない。

「ごめん」

約束、守れなかった。

うつむいて呟いた。ちっぽけな同情は、例えようもないほど重い後悔に変わった気がする。

「そんなことないよ」

細い声が、耳に届いた。夜、看護師に見つかるからと、いつも小さな声で話し合ったときのまま。

「おにいさん、ちゃんと来てくれたもん」

裏口が、わずかに開いている。透けるガラス戸の向こう側に、白い影。いつもの白いパジャマ姿で、小さく細い少女が、

「ありがとう」

和人を見て、笑っている。

いるはずがない。少女はすでに永遠の眠りについていないはずだ。

いるはずがない。昼間看護師に聞いたではないか。

でも。

「それ、タンポポだね」

彼女は目の前で嬉しそうに笑っている。

「あ、うん。でも、昼に摘んだからしおれちゃったかな……」

呆然と和人はそう返す。目の前の少女は覚えているままだった。

あまりにもそのまままで、変わらない姿に恐怖心など感じなかった。

「しおれてないよ。元気だよ」

「え、あ、あれ？」

少女が指差すタンポポは、摘んだときと変わらないみずみずしさを見せていた。先ほどまでしおれていたはずなのに、おかしいと少しだけ思ったが、和人はそのままタンポポと花束を少女に手渡した。「ありがとう、おにいさん。えへへ、いい香りだね。こっちのお花もかわいい」

はにかむ少女は可愛らしく、心から喜んでくれていたから、和人は約束を守れて良かったと思った。それから、悲しく思った。

「なんで、ここにいるんだい？」

いなくなった少女。もう彼女は自由のはずなのに、どうして病院の裏口にいるのだろう。どこにだって行けるはずなのに。

「だって、どこに行ったらいいのかわからないの」

病院しか知らないから。ここで待っていればお兄さんは来てくれると思ったから。彼女は無邪気にそう言った。

「あ、でもね、ひとつしてみたいこと、あるの」

少女は小首をかしげて和人を見た。

「おにいさん、ラーメン屋さん連れてって。一回食べてみたいの。とっても美味しいんでしょ？」

にっこりと彼女は笑う。和人は泣き出しそうになった。同情も、

後悔も、この笑顔の前では無意味だ。意味がない。意味がない。

「いいよ、行こうか。おにいさんがおごってあげるよ……」

病院の外を知らずに逝ってしまった彼女のために、出来る限りのことをしてやりたいと、思った。

お願いしたんだよ。おにいさんとラーメン屋さんに行ってみたいって。

お願い、かなったよ。すごくうれしい。

おにいさん、タンポポありがとう。かわいい花束ありがとうね。

すごくすごく、うれしかったよ。

ありがとう、おにいさん。

朝。

昨夜の痕跡を示すものはなにもない。ただ、和人の手の中からタンポポと花束が消えただけだ。

どこかで落としたのかもしれない。ありえない夢を見たせいで、どこかに置いてきたのかもしれない。

少女と会った痕跡は、どこにもない。なのに彼女が夜の病院に戻って行ったことは覚えている。少女はあそこにいるのだ。あそこから出ては来ない。

生まれてずっと病院で、病院しか知らない少女は、いなくなつて

も病院の中にいる。

朝の光の中で、やるせない想いに捕らわれたときだった。

「要らないところはない？」

声が、した。

全ての元凶としか思えない、双子の声が。

「貴方の身体で、要らないところはない？」

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」

「貴方の望むものをあげるよ。だから頂戴」

同じ顔で、違う表情で、彼女たちは言った。

身体の要らないところをくれるのならば、望むものをあげると。

少女は望んだのだと、今は理解できる。病気の身体を全てあげるから、代わりに彼女のしてみたいことをさせてほしいと。

和人と一緒にラーメンを食べてみたいと、そんなささやかな望みすら許されなかった少女。

あの小さな白い姿を、昼に見ることは出来なくなった。

和人は双子を見た。

元凶。そして。

夜。

和人は目を開ける。そろそろだろうか。時計を見る。さっき見たときよりも大分時間が経過していた。

もうそろそろ連絡が来てもいいはずだ。彼女が病院に運ばれてから優に五時間が経過している。

初産だからひよつとするとともに時間がかかるかもしれない。とにかく出産と言うものは時間がかかるものだ。特に初産ならなおさらである。案外ポコツと簡単に生まれたと言う話も聞くには聞くが、

そう多くはない。

頼杖について電話がある方向に視線を向けた。鳴る気配が事前に分かれれば安心するのだが、あいにくとそんな特技は持っていない。ただ待つだけだ。それしか出来ない。

まだだろうか。そわそわする心が自分でくすぐつたい。

まだだろうか。待っているのに。

くすぐす。

笑い声がした。

白いパジャマが視界をよぎる。

ああ、そうか、夜なのだ。彼女が起きる時間なのだ。和人は思い、苦笑した。

「面白いかい？」

「うん」

白いパジャマの少女が楽しそうに笑っている。

「おにいさん、落ち着かないね」

「そうだね。落ち着かないよ」

「初めて子供生まれたときみたいだよ」

「ああ。あの時もこんな感じだったかい？」

「うん」

笑いながら少女は和人の脇に座った。月の光に透ける、変わらぬい小さく細い姿。

「孫、楽しみだね」

「そうだね、楽しみだよ」

隣に座った少女は、新しい家族が増えることが嬉しいのだ。

初めて少女に会ったときからすでに数十年が経っている。あちこちガタがきている自分の身体を見下ろして、和人は笑った。その右手首から先がない。

「ね、名前、決めたの？」

「うん？ まだ考え中だよ。男の子なのか女の子なのか、生まれるまでのお楽しみだったからね」

息子の嫁が出産する。初めての孫だ。和人の妻は息子夫婦について病院にいる。

「君にも考えておいて欲しいって言っていたよ」

「うん、言われた。いっぱい考えてるよ」

「そうか。どれがいいかなあ」

「どれがいいかなあ？」

笑いあう。

幽霊と同居しているなどと、普通の人が知ったら気がふれていると思われるだろう。

だが、妻も息子も娘も、息子の嫁も娘の夫も知っている。

白いパジャマの少女。和人が若い頃に足を折った病院で出会った、彼女。

病院しか知らない少女に、外の世界を見せてあげたかったから。

たくさん楽しいこと幸せなことがあると教えたかったから。

命は戻らない。でも魂は存在している。ならば、共に歩くことができるかと。

あの日和人は双子にそれを望んだ。

ほかにもっと上手い方法はあったのかもしれない。でも、あの時はそれしか思いつかなかった。病院から少女を解放してあげることだけを考えた。

あなたって、馬鹿よね。妻になった女性には苦笑された。

お父さんって、お人好しだよ。息子と娘には笑われた。

お義父さんは、いい人ですね。嫁と婿は微笑んだ。

そうして、少女は家族の一員としてここにいる。

赤の他人だ。血の繋がりなどない。でも、今ここにいる彼女はまぎれもなく家族だ。

「男の子かな、女の子かな」

「どうか、どっちがいい？」

「うーん、うーん、元気だったら、どっちでもいいよ」

「そうだね、それが一番かな」

「病院しか知らなかったら、かわいそうだもん」

「そうか。そうだね……」

少女は和人がいなくなるまでこのままだろう。和人がいなくなっ
てしまったらどうなるのか分からない。一緒のところに行くのか、
そうでないのか。

それとも、和人も少女のように残るのかもしれない。

それならそれでいいとも思う。

自分はやるべきことをした。望むことをし、家族の理解もあり、
幸せだからだ。

「楽しいかい？」

「うん！」

そして、少女も笑っているから、悔いはない……。

夜が謳う。

難病の白いパジャマの少女と、足を折った青年がいた。

外を知らない少女のために、青年は出来ることをしたいと望んだ。

青年は心そのままにそれを貫いた。

一心に、赤の他人の少女のために。

少女は笑う。嬉しそうに幸せそうに。

青年に貰った幸せな時間は、確かに彼女のものになったのだ。

青年は中年になり、やがて老年を迎える。それでも少女は少女の
まま、彼を慕う。

夜、少女は目覚め、兄とも慕う彼と話す。

いつか限りが来るノクターン。

それでも、少女と彼はそのままで笑いあう。

いつか終わるノクターンでも、幸せなものだと、知っているから
。

参・ホスピタル〜夜想曲（ノクターン）・5（後書き）

三章が終了しました。『何かをしてあげたいと思う心』と『わずかなものでも楽しむ心』。心のありよう一つで、きつと幸せになれるのではないかと、思います。

四・パースティ〜聖譚曲（オラトリオ）・1

道にへたり込むようにしている彼を助けたのは、何故だったのか。今だに自分にも分からないと、彼女は思う。どう見ても家出少年だった。

何の理由で家を出たのかは分からないが、とにかく未成年で親の保護が必要な年頃であることには違いない。

下手をすると助けた彼女のほうが未成年誘拐とか言われないうか。

「なんでかしらねー」

芋の皮をむきながら呟く。今夜はカレーの予定だ。

作るのは四人分。なんせ彼は育ち盛りの高校生。一人で三人分食う。

「食費だつて馬鹿にならないのにさー」

むきむき。次はニンジンの皮をむく。

「捨て猫や捨て犬ならまだしも、よりによって人間捨つか、あたし一人暮らしのOL五年目。特に裕福なわけでもなく、恋人でもいたらちよつとは人生楽しいかなとも思ったりもするけれど。」

「高校生捨つことないじゃんねえ。生活力ない、金もない。あるのは若さと後先考えない突進力だけなのにさー」

「だーっ、うるせえなっ！ 捨つてくれなんて頼んでないだろがっ！！ 大体バイト見つけてきてなんぼか払ってるだろっ！！」

たまねぎを切っていた彼は、目の前でグチグチ言われるのに堪えかねたのか、さすがにツッコみを入れてきた。

「コンビニのバイトくらいで威張られてもねー。せめて正社員でしょ」

「ふつとあざ笑ってやる。」

「……分かった。土木作業でもやってくる。日払いで割がいいとかって聞いたし」

「あつはつは、アンタに勤まるわけないでしょーよ。ひよるひよるなくせして」

ゲラゲラ笑つてやると、すねたらしくそつぽを向いた。

家出少年を拾つて、同居生活が始まつてはや二ヶ月。

妙齢の女性と年下の高校生男子。言葉だけ並べると色っぽい展開になりそうな組み合わせだが、実際そんなことはお互いに毛頭考えていなかった。

彼女のほうは生活力のない年下などごめんだっだし、高校生男子のほうは二十歳越えたおばさんなんてごめんだと言い放つたくらいだから。

脱ぎたてのパンツを洗濯させる女と、その下着に、こんな変なパンツはいてるなよババアと言い捨てる男子である。色っぽい展開になりようがない。

『アンタもおかしいわよね。ここにこんなに素敵なおねえさんがいるっていうのに、ハアハアしないわけ？ 高校生くらいって年上に憧れない？』

などとからかつたこともあつたが、返答はひとこと。

『おばさん相手にハアハアする変態じゃねえ』

二十代前半の女性におばさんと言い捨てる暴挙に出た男子には、きちんと『しつけ』をしておいたが。

「今日は何時よ？」

「いつもと同じ」

今、彼は夜間、コンビニの店員アルバイトをしている。彼女の弟ということになってるが、店の人がそれを信じてくれたかは分からない。

別にどうでもいいと思う。彼が出て行きたくなつたら出て行けばいいし、居たいのならいい。

そんな関係。

変な女。

第一印象はそれだった。道に座り込んだ自分を、ほかの人間は見
てみぬフリでどんどん通り過ぎて行くのに、彼女は止まり、話しか
けてきた。

『よっ、家出少年。行くところないのか、なっさけなーい』

いきなり馬鹿笑いされたときには驚いた。馬鹿にされたと感じる
よりもまず真っ先に驚いた。次に、酒でも飲んでいいのかと思った。
夜半だったし、酔っ払いが絡んできたのかと。

だが、彼女はシラフで、心から本気だった。

『よし、拾ってやる。来いっ、ポチ』

襟首を掴まれて連行された。暴れる気力もなくなっていて、どう
でもよくなっていったからおとなしく連れて行かれた。連れて行かれ
た彼女のぼろっちいアパートの部屋で、温かいご飯を食べた。

何を企んでいるのかも思ったが、彼女は平然と言ったのだ。

『その辺で寝れば？ 好きにしなよ。出て行きたいなら出て行って
いいし、居たいならいなよ。あ、布団は押入れ。寝る前に風呂に入
れ。不潔なのは許さん。洗濯もテキトーにすること。ついでにあた
しのもしておいて。それからあたしが寝てるここに夜這い仕掛けて
きたら、去勢するから。将来結婚したとき奥さんに泣かれないなら
どうぞ』

第二印象。やっぱり変な女。

というか、常識的に考えておかしいだろう。どう見ても家出と分
かる未成年男子を、あっさりと連れてきて、そのまま居座らせるな
んて。

しかも拾っておいて（強引に連れてきておいて）自分でもなんで
拾ったのか分からないと首をひねっているなんて、どう考えてもお
かしい。

家に帰れなんて一言もいわないし。

第三印象。どこまでも変な女。

同居生活十日ほどで、彼女に対するイメージは明確に固まった。
恋とか愛とか、そんなものはないと思う。どうして一緒にいるの

組曲～移し身の双子～

か分からない。

でも、別にイヤじゃない。だから一緒にいるだけで、特に意味はない。

彼と彼女は、そんな関係。

四・パースティ〜聖譚曲（オラトリオ）・2

「子供でも作るかなあ」

休みの日、突然彼女の言い出した言葉に、彼はコーヒーを噴いた。「誰とっ!？」

後ずさりながら問い質す。まさか自分とソウイウコトをするつもりなんじゃないだろうかと警戒心がありありと出ている。

「アンタじゃないわよ」

彼女のほうもヒラヒラと蝶のように手を振って否定する。

同居を始めて四ヶ月目。色恋沙汰とは程遠い仲のままだ。

「驚かすなよ、襲われるかと思っただろ」

「普通、逆じゃない? それ、あたしが心配することじゃない?

なんで男のアンタが心配すんの」

「あんだヘンジンだから何するかわかんねえし」

「ひどっ!」

怒るでもなく、彼女はゲラゲラと笑った。彼女の様子にあきれて自分の噴いたコーヒーを拭い、彼は彼女を見る。

「恋人でもできたのか?」

「へ、なんで」

彼女は不思議そうに訊き返す。

「何でって、子供つくろうかなとか言ってるから」

てつきり意中の相手でも出来たのかと思った。それなら自分は邪魔だから出ていかなくてはならないかなとも、思った。

「彼氏なんかいないよ。知ってるでしょ」

にんまり笑って彼女は言う。『ヘンジン』の彼女に恋人はいない。一瞬彼はからかわれたのかと思ったが、彼女は本気だ。きつと本気だ。

この上もないくらい、本気で言っているのだろう。

「……相手いないのにどうやって子作りするんだよ……」

「いや、気合でー」

「できるかあっ!!」

「だってヒマだし」

ヒマだから、気合で。

「ほら、子守もちょうどよくいるし。チャンスかなあと」

アホだと、思った。というか、子守って誰のことだ。問わずとも彼のことを指しているのだと充分に分かったが。

「あんた、生まれてくるときに常識とかモラルとかそんなもん全部置いてきただろ？　それで冗談とか悪趣味とかそういうもんで身体を構成してるだろ、絶対」

ゲンナリとツッコむ彼に、彼女は笑う。

「上手いこと言うねー」

「褒めるなっ！　イヤミも通じないのかあんたはっ！」

「ちよつと、ポチ。肩揉んでー」

「ポチ違う」

ソファに寝転がっている彼女。床に転がって雑誌を呼んでいる彼。

「じゃあコロ。肩揉んでー」

「コロ言うな」

ビールの缶を口に運び、テレビを見ている彼女。寝返りを打ってうつ伏せになる彼。

「じゃあバイオレンストロピカーナエクセレントボンバーマン。肩揉んでー」

「いきなりすっ飛んだなオイ。しかもなんだよそれ。適当に言っただろ」

うつ伏せになった彼の背中を足を伸ばして踏む彼女。転がって避ける彼。

「じゃあオカマ。肩揉んでー」

「違うっ!!　断じて違うぞそれはっ!!」

ケラケラ笑う彼女。ようやく起き上がる彼。

「いいから肩揉めー」

「命令かコラ」

同居半年。総じて上手くやっている。

クリスマスとか、正月とかを彼女と彼はすごして、バレンタインデーにはいかにもお義理のチョコをやり、ホワイトデーには三倍返しどころか三十倍返しを要求されて理不尽だと叫びながらも結局二倍返しでお返しをし、誕生日には『ヲホホホ、アンタもひとつひとつじいになつていくのねー』『やーい、ますますババアになったな』などと嫌がらせのプレゼントをし合い、笑いながら時間は過ぎた。

恋人じゃない。友人でもないかもしれない。

そんな関係の、彼女と彼。

同居して、一年が過ぎようとしていた。

「家に、帰ってみようかと思う」

真剣な表情で彼が言い出したとき、彼女はうんと頷いただけだった。

悲しそうでもなく、嬉しそうでもなく、いつものように、ごく普通に。

「氣いつけて行ってらっしゃいな、アンタけっこうドジだからねー」

「うるさいな。あんたに言われたくないよ」

小さなバッグに荷物をつめて支度する彼は、少し迷っているようだった。でも、彼女は止めないし、背中を押すこともない。

「……あのさ」

「なにかなー？」

「ここ、帰ってくるから」

振り向かないまま、彼は彼女に言う。ここに来て、彼の物は増え

た。来たときにはバッグひとつなかったのに、今はバッグひとつでは収まりきらない。

「おれ、鍵持っていていいよな。バイト、休むだけで辞めるわけじゃないし」

この場所に戻ってきていいかと、おそろおそろ彼は訊く。

それを聞いて、彼女は。

「あたりまえでしょー」

笑っていた。

恋人ではない。もしかしたら友人とも言えないかもしれない。そういう、ふたり。

四・パースティ〜聖譚曲（オラトリオ）・3

彼が帰って一日目。

この部屋の中って広がったんだなあと彼女は思った。一人減っただけでずいぶんとがらんとした感じがする。この一年で増えた彼の荷物はそのまま、物が減ったわけではないのだけれど、それでも広い。そう思う。

「うーん、意外」

呟いて部屋を見渡した。彼はいない。部屋の中には彼女だけだ。

まあ、帰ってくるとか言っていたから帰ってくるつもりなのかもしれない。休暇は三日。四日目の朝には彼はこの部屋に戻っているかもしれないし、戻ってこないかもしれない。どうするかは、彼の自由だ。

おそろおそろ訊いてきた彼。帰る決断をするには勇気がいっただろう。どうして彼が家を出てきたのか彼女は知らない。知る気もなかった。拾ってきた理由すら分からないのに、そこまでの事情まで首を突っ込む気もない。

あー、洗濯係がいなくなったなあ。そんなことを考えた。三日間一人でご飯食べるのか、一人分って実は不経済なんだよね。そんなことも考えた。

広く感じる部屋を眺めて、彼女はいつものように仕事に出た。

晩ご飯はしばらくコンビニ弁当かな。そんなことを考えて。

彼が戻ってくることを、恋人でもない彼女は疑っていなかった。

久しぶりに帰った家で、家族は目を見開いて彼を出迎えた。

一年音沙汰の無かった彼を、父親は叱らなかつた。母親も叱らなかつた。

ただ、心配していたのだと言った。

どこで何をしていたのかすら、訊かなかった。無事でいてくれて嬉しいとだけ言った。

弟は馬鹿と叫んだ。目が真っ赤だった。

心配されていたのだと知った。

「バイトしてるんだ。休み取っただけだから、三日したら戻る」

そう言うのと、母親に泣かれた。帰ってきたと思ったのにまた行ってしまふのは止めてと。

息が苦しいと思った。血の繋がった家族だけれど、まぎれもなく家族なのだけれど。

辞めて帰ってきなさいと父が言う。学校はどうするんだと言われ

る。

息が出来ない。
家ってこんな場所だったのかなと、思い返した。どこにいても息苦しくて、それが自分の部屋でも息苦しかった。

初めて息が出来たのは、どこだっただろう。
家に戻ってきて二日目。ぼんやりと思った。

此処こゝに居たくないな、と。

馬鹿みたいな変な女の家に戻って、アホみたいな会話がしたい。
そんなことを考えた三日目。もう彼女の部屋に帰ろうかと思っ

ていた日。
朝のテレビを見て、彼は愕然とする。

にぎやかしのワイドショー。どこを見ても似たような番組で、ヒマな主婦しか見ないような朝番組。何とはなしにつけていた番組で、耳慣れた名前を聞いた。

彼女。

刺された。意識不明の重体。通り魔。犠牲者は五人。夜中。出歩いた。三人死亡。血の染みた地面。残りのひとりが重傷。

ああそうだ、そう言えば冷蔵庫のビールがきれていた。もうあと

二本しかなかった。一晚一本。ここに来て三日目。昨日でビールはなくなっただろう。気がついて彼女は買いに行ったのだろう。

いつもなら、夜間は彼も一緒に行った。最近物騒だからねと、彼女は面倒だと渋る彼を無理矢理連れて行った。それ以外なら彼がバイトの帰りに買って帰った。

一日一本。アルコールで太るからと彼女は決してそれ以上飲もうとしなかった。

何で買っておかなかったのだろうか。あと二本。無くなると分かっていたのに。

何で我慢しなかったんだ。明日、いや、今日の夕方には彼はあの部屋に帰ったのに。

何で昼に行かなかったんだ。昼間なら、怪我なんて、襲われることなんてなかったんじゃないか。

彼は電話に飛びついた。どこに何を訊けばいい？ 事件のこと、彼女のこと、彼女が運ばれた病院のこと、彼女の容態、怪我。

彼は彼女の身内でもなんでもないので、恋人でもないのに。

どうしたのと母親が声をかけてきた。テレビ画面を見て真っ青になった彼を見て心配になったのだろう。

知り合いが。
刺された。

世話になった女性が。

途切れ途切れに言うと、母親も青くなった。どういうこと、どんな知り合い？

何かおかしなことを想像したのかもしれない。

わあわあ母親はわめいた。家出した息子が変な女性にたぶらかされていたのだと心配している。

そんな関係じゃない。彼女とはそんな風になろうと思ったこともない。想像したことさえなかった。でも、いくら言っても信じてもらえなかった。

妙齡の女性との同居で、何も無かったなどというのはそんなに信じられない話なのだろうか。

だって本当に何も無かった。そんな気もなかった。ぐだぐだ話して、一緒にご飯を食べて、違う場所で寝て、時には朝までくだらない話で盛り上がりたりしていただけだ。

それがどれだけ彼にとつて必要な時間だったかなんて、考える必要もないくらいに大事な時間と空間。

それをくれたヘンジンな彼女。

死ぬかもしれない。

死ぬかもしれない。

今彼があ部屋に行っても、彼女はいないのだ。

今後彼があ部屋に戻っても、彼女は戻らないかもしれないのだ。ザワリと血が引いた。何もかもがなくなる気がする……。

あたし、死ぬかも。

刺されて地面に倒れこんだ彼女は思った。ものすごい勢いで血が出ている。生まれてこのかた見たことがない勢いだ。

なんつーか、死ぬかも。

暗くなる視界に、ふと、彼のことを思った。

あー、鍵持つてるから大丈夫だよなえ。でも生ゴミ出してないって怒られるかな。結構細かいから、あいつ。あ、あたしいなくなったら住むところ無くなるじゃん。あの部屋の家主あたしなんだから。まずいなあ、男と同居してたなんて知れたら、うちの親大喜びするじゃん。同棲じゃないよー、そういう関係じゃないよー。

うう、彼上手く言い訳してくれるかなあ。

眠気のような感覚に抗えず、目を閉じながら彼女は思った。

ああ、明日晴れたら彼の布団干してやろうと思ったのになあ。

ふかふかの布団をありがたく思えと、笑ってやろうと思ったのになあ……。

自分の部屋で、彼はぼんやりとベッドに座り込んでいた。アチコチの病院に電話をして、彼女の容態を確かめようとしたが、母親に邪魔された。

探しようもなかった。身内じゃない。恋人じゃない。彼が彼女を探す理由が、他人には分からない。彼女を心配する理由が他人には不可解だ。

あの部屋の鍵が彼の手の中には在る。

彼女の部屋。預金通帳とかも無造作に置いてあつて、ちよつと考えろと注意したらアンタ持つてくのー？ と、またも無造作に訊かれた。あんまり金額入ってないよ、ピンボーだから、とも笑つていた。

彼女はアホだ。とんでもないアホでヘンジンで手がつけられないくらいに。

大体、高校生男子に説教される成人女性なんて頼りないにもほどがある。

家出少年を連れ帰って、包容力があると思わせといて無い。何で連れて帰つたんだろうなんて首をひねる女。

「あほだろ、あんた」

鍵を見下ろして、彼は呟く。

「死ぬなよ……おれ、帰れないだろ」

あの部屋に帰りたい。あの部屋で彼女とまた話したい。当たり前のように、過ごしたい。

それを願うのはおかしいのだろうか。

「要らないところはない？」

声が届いた。彼しかいないはずの、彼の部屋で、女の子の声を
る。

彼は顔を上げ、見た。

可愛らしい少女がふたり、ドアの前に立っている。

同じ顔で、一人は笑い、一人は無表情に、立っている。固く手を繋いで。

「要らない部分でいいの」

「貴方の身体で、要らないところははない？」

同じ顔、同じ声、表情だけが違う女の子が、彼に訊く。

どこから入ってきたのだろう。下の階には母親と弟がいて、彼が脱走するのではないかと怯えている。逃がすものかと構えている。

「わたし、音亜」

にこやかに、少女が笑う。

「こっちは優亜。おねえちゃんなの」
双子、だ。

無表情に、優亜が言う。

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」

「貴方の望むものをあげるよ。だから頂戴」

身体 of 要らない部分をくれと、双子は言う。

「望み……かなうのか？」

彼は手の中の鍵を握り締めた。誰でもいい、なんでもいい。彼女が死なないのなら、あの部屋にもう一度戻れるのなら。

「かなうよ。それが貴方の望むカタチとは限らないけれど、かなうよ」

その言葉に、彼は戸惑った。どんなカタチが分からないのに、答えてしまつていいものだろうか。

「……身体って、どうやって持っていくんだ？」

ひょっとしてこの少女たちも通り魔なのだろうか。彼はここで殺されるのかもしれない。

「いろいろ」

優亜は無感情に言い放つ。そのひとことで全て説明したとでも言いたげに、双子は口をつぐんだ。それ以上は聞けないと感じて、彼

は違う疑問を口にする。

「……………何に使うんだ？ どうする気なんだ？」

「造るの」

「わたしたちを」

にこやかに、無表情に、双子は言う。

「……………なんで？」

意味が分からなかった。造るという言葉。しかも双子は自分たちを造ると言うのだ。

いぶかしむ彼に、双子は声を揃えて答える。

「手を離したら死んじゃうから」

「え……………」

繋がれた細い手指。決して離れてはいけなくてもいっように。

「死んじゃうの」

にこやかに、音亜が言う。

「わたしか、音亜が死んじゃうの」

無表情に優亜が言う。手を離せば自分か妹かどちらかが死ぬと。

「な、なんで？」

そんな話があるのか。手を離したら死んでしまうなどとは。

「分からない。手を離したことがないから」

なのに手を離したらどちらかが死ぬと双子は言う。確信している声だった。離してしまえば比喻でなく、二人のうちのどちらかが死ぬのだと。

「だから、死なないわたしたちを造るの」

そのために、他人の身体を集めていると。

「どうやって……………造るんだ？」

「さあ？」

優亜が首をかしげた。

「でも、造るよ」

さも当然というように、それが常識とでもいっように。

「だから、要らないところがあるのなら、頂戴」

繋いだ手を離したら死んでしまう姉妹のために、彼女たちは他人の身体をつなぎ合わせて死なない身体を造るという。男女関係なくひよっとしたら老若も関係ないのかもしれない。ひとえに、死んでしまいかもしれない姉妹のために。

そんなことがあるのか、ありえるのか。

「なんで、死ぬんだ？ 手を離したただけで死ぬのか」

「うん」

「死んじゃうの」

理由が分からない。そう思う何か彼女たちにはあるのか。手を離したら生きていけない、二人。

「わたしが死ぬのはいいけど、音亜が死ぬのはいやなの」

「わたしが死ぬのはいいけど、おねえちゃんが死ぬのはいやなの」
死んでしまうどちらかのために、死なないで欲しいと願う、もう片方。

彼女らは声を揃えて彼に言う。

「だから、要らないところがあるのなら、頂戴」

私の姉妹を死なせないために。

一体この双子は何なのだろう。人ではないのかもしれない。いや、きっと人間ではないのだ。手を離せばどちらかが死んでしまう双子。彼は思う。

そんなこともあるのかもしれない。彼女のところでないと思が来ない彼のように。

彼女が死んだら彼も息が出来なくなつていずれ死ぬだろう。身体でなく、心が先に死ぬだろう。自由に息が出来る空間を知ってしまった彼は、彼女のところに戻る意外に生きる希望がない。生きていこうという気持ちがない。起こらない。

「助けることできるのか？ おれ、もう一度あの部屋に戻れるのか

？ 一緒に、暮らせるのか？」

恋人じゃない。でも大事な人。

友人ともいえない。でも大切な人。

あの日偶然会って、それから情性のように一緒に暮らしているだけの、人。

強く握り締めた手の中の鍵の感触が痛い。

彼女の部屋。居候している彼。

あの部屋で初めて、心から笑うことを知ったように思う。

あの部屋で初めて、息が出来たように思う。

彼女が、いたから。

手の中の鍵。二度と使えないかもしれない物。

いつもの明るい彼女の笑い声がしたような気がする。その瞬間に決心はついた。

彼は顔を上げ、双子を見た……。

四・パースティ〜聖譚曲（オラトリオ）・4

「痛い」

目を開けた瞬間の彼女の第一声がそれだった。

泣き出しそうな家族の顔がある。一人暮らしをはじめてから、実家にはなかなか帰れなくてしばらく会っていなかった家族。

聞くとけっこう彼女は危険な状態だったらしい。意識不明が二日間続いて、死者がもう一人増えるかどうかの瀬戸際だったようだ。

犯人は事件の直後に取り押さえられた。死者は三人。重傷者は彼女を入れて二人。

もう一人の怪我人は彼女ほど重い怪我ではなかったようだが、軽い怪我でもない。

助かって良かったという家族に、生きてて良かったと笑いかけ、それから彼女ははたと思い出した。

「あ、大丈夫かな、生ゴミ」

同時に思い出したのは彼のこと。鍵を持っているから大丈夫だろう。帰ってきて家の中を見て、多分彼がまず真つ先にやるのは洗濯ついでにゴミ出ししてくれないかなあと思う。

ついていてくれた母親が、お母さんがやっつくからと言ってくれたが、彼女は笑った。

「いいよ、やってくれる人いるから」

母親は目を丸くした。恋人でもできたのかと思っただらしい。

そんなイイ人ができたのなら紹介しなさいと目の色を変えた。

「いや、そんなんじゃないよ？ えーっと、拾ったの。命名・バイオレンストロピカーナエクセレントボンバーマン……だったっけなあ」

なによそれ。恋人をそんな風に呼んでいるのかと母親はあきれている。

「いや、家出少年をね、拾ったのよ。で、同居してるんだけど、恋

人とかソウイウコトは全くなくて、同居。同棲じゃなくて、同居」
母親は無言になった。不可解なものを見るような目で彼女を見、それから彼女の額をぺちんと叩いた。

犬猫じゃないのよ、何でもかんでも拾わないのっ！と、怒られた。さすが彼女の母親だけあって、怒る視点が少し違うような気がする。

「あつはつはつは、いたたた、うー、傷痛い。そういうわけで、うちの中に変な少年がいても通報しないでねー、バイオレンストロピカーナエクセレントボンバーマンって言えばおとなしくなるから」
娘の奇行に慣れている母親は、律儀に名前をメモし、覚えるように呟いていた。

「追い出したりしないでねー？ 彼、行くところなくなっちゃうからさあ」

ケラケラ笑って、彼女は言う。

「それから、見舞いに来ないと暴れるぞって言ってやって。おねえさんはいつものケーキが食べたいなあって」
家で待つ彼が、孤独な思いをしないように。

「ビールはきらしたらいかんと、心から思った」
しかめっ面で、彼は言う。

「うん、それはあたしも思った。次からはちゃんと買っておいでねー」

「おれがかつ！ 自分で買えよ社会人！！」
ちっこい花束を持って彼が訪れたのは彼女が病院に運ばれてから四日目。

彼が戻ってきて二日目のことだった。

「つか、あなたの母さんも変だ。会うなり娘をよろしくとか頭下げてこられたぞ」

部屋に戻ってそこにいた母親に、真っ先に、あなたがバイオレン

ストロピカーナエクセレントボンバーマンさんね？ とか言われて目を丸くしたのは本当の話だ。それで彼女の母親だとすぐに理解できたのだが。

「ははは、アンタあたしの恋人と思われてるからねー」

「うっそ!? 何で否定しないんだよっ!」

「したよ。したとも。ただの同居人と何度言っても信じてくれなかつたのさ、ふふふ」

「……親にも信用されていないのかあんたの言動は……つか不名誉だ、なんとしてでもそのイメージを払拭してやる!」

「わはは、がんばれー」

「あんたもやるんだっ!」

彼女は変わらず笑っている。彼は変わらずツッコミを入れてくる。ひととおり笑ってから、彼女は彼の顔を見た。目の回りにくつきりとアザがある。頬は腫れているようだった。

「男前になったねえ、派手にやったっぽいけど?」

「んー、まあね。なかなか家から出してもらえなくなったから、話し合ったんだけど聞いてもらえなくて、殴られた」

もう一度家から出ることを、彼が悪い女性に騙されていると思いついて家族は納得しなかった。最初は話し合った。長い時間話したけれど理解してくれることは無く、そのうち興奮してきた父に殴られた。勘当を言い渡されたのだ。

そんな女にトチ狂った息子などもう知らんと。最初から最後まで彼の話の聞こえはしない家族だった。

「ま、そのうちなんとかするさ。ちゃんと生きて、いばって帰れるようになったから、親父の頬殴り返しに戻ってやる」

「おお、男らしい。かあっこいいじゃん」

茶化すように言うが、彼女は本気で言っている。知っている彼はそっぽを向いた。くすぐりたいのだ。

「うっさい。いいからおとなしく寝てるよ。悪化しても知らないぞ」
彼が照れているのを感じ取って、彼女は微笑む。

「あ、そーだ。生ゴミ出してくれた？」

「そうだ！ あんたなあ、ゴミはちゃんと忘れず出せって帰る前に言っておいただろっ！ なんだあの台所の隅に隠すように置いてあった袋はっ！？」

「生ゴミ」

「開き直るなっ！！」

「生ゴミ」

「可愛らしく言ってもゴミはゴミだっ！ むしろあんたがキモいわっ！！」

「ひどっ！ ケーキ持っても来てくれない薄情男に言われたー」

「まだ禁食だろうがっ！ 花束持ってきてやったことに感謝しろっ

！」

「えー、小さいじゃん花束」

「……次はケーキにしてやるよ、アホ女」

当たり前のようなやり取りに、どれだけホッとしたか彼は知らない。

当たり前のようなやり取りに、どれだけホッとしたか彼女は知らない。

帰ってきた。

帰ってこれた。

生きている。

生きていてくれた。

また、話せる。

恋人じゃなくても、友人じゃなくても、一緒に住んで、生きていける……。

いつか出て行くかもしれない。出て行かないかもしれない。いつ

までもこのままいることはないかもしれないし、いつまでもこのまま一緒にいるかもしれない。

「そのうち結婚でもするかー？ 少年よ」

「ごめんこうむるっ！ 断固拒否！ 絶対イヤだ！」

「冗談ですわよ？ 何をそこまで顔真つ赤にして否定するわけー？」

「質の悪い冗談を言うなアホ女っ！」

ゲラゲラ笑う彼女。しかめっ面で、でもどこか楽しそうな彼。

退院の日、彼は彼女の荷物を持って、一緒に歩いている。

二人はぼろっちいアパートの、あの部屋に帰る道を歩いている。

ふと、彼は口を開いた。

「……あのさ」

「なにに？」

「身体的要らないところをあげたら望みがかなうって言われたら、あんたはどうする？ やるか？」

「なにそれ？」

「いいから」

彼女は彼に視線を向けたが、彼が真顔で訊いているのを見て取って、真剣に考えた。

「どこでもいいの？」

「いい。とにかく、要らないところくれって言われたら」

「何でもかなうの？」

「……望むカタチとは限らないけど、かなうって言われたら」

それは彼があの子に言われたことだ。彼女に双子のことは話していない。多分彼女は信じてくれるだろうが、話さなくてもいいと思った。

「うーん、そもそも要らないところがないからなあ。言われても困るなあ。望みって言っても 自分の身体差し出してかなう望みなんてタカが知れてそう」

唸りながら彼女は考え、言い切った。

「あげない。頼まない。自分でなんとかする」

にまりと笑い、軽やかに言い切る。

「そっか」

彼も笑った。彼女ならなんとなくそう言うだろうと思った。

だから、あの時。

『どこも必要だから、あげられない。彼女は死なないと信じる。おれはあの部屋に帰る。自分の力で家族を説得して、自分の意思で帰るから』

彼は双子の誘いを断った。自分の身体のどこかと引き換えにして彼女が助かり、あの部屋に帰ることが出来ても、それはきっと何かが違うと感じたから。

自分の力で、自分の意思で、彼女が戻るのをあの部屋で待とうと思った。

どんな結果であろうとも、自分の選んだことだから。

どこか満足そうに頷く彼に、彼女は思う。

ああ、あの子達に会ったんだと。

同じことを言われたことがある。それは彼に出会う直前のことだった。

『要らないところはない？』

手を繋いだ同じ顔の双子。にこやかに、無表情に。

彼女は答えた。

『あたしの身体は全部必要なところなの。要らないところなんてないよ？』

望みはあった。恋人が欲しいとか、結婚したいとか、もっと楽しい仕事がしたいとか。

でも、それは人にかねえてもらうものではないし、自分でなんとかしようと思えばできる類のものだ。だから彼女は胸を張って答え

た。

『あたしの身体は必要なものなの』

彼女自身にとって彼女の身体は必要なものだから。

双子は顔を見合わせて、残念そうにそのまま雑踏に消えていった。ちよつと後悔したときだ。道端にへたり込んでいる少年に気がついたのは。

気力なく道に座り込む彼に、誰も目を向けようとしなかった。

彼女は彼に声をかけた。寂しかったとか悔しかったとか、そんなことも考えてなかった。

理由はない。本当にない。

だから彼をどうして捨つたのかも分からない。

どうして今も一緒にいるのか分からない。

でも、別にいやじゃない。

そんな他人同士。

恋人とも友人とも違うけれど、他人じゃない他人。

そんな関係の、二人。

「ケーキ買ってくれたー？」

「買ったよ。ビールもあるよ」

「肉はー？」

「肉う？ 今言うなよ、前の日に言っとけよ」

「カルビー、骨付きソーセージ、牛ー、豚ー、ホルモナー」

「給料日前のバイトに多くを望みすぎだっ！」

社会人なんだから自分で買え。そう叫ぶ彼に彼女は笑う。

「いいじゃん、生還してきたおねえさんの新しい誕生日をお祝いしなさい」

「命令形だよこの女……」

「お誕生日おめでとうあたしー。ついでにアンタ」

「なんでおれもだ」

「ついで」

笑いながら、彼女は思う。

誕生日おめでとう。あたしと彼。
あたしは生きて帰ったことを。
彼はこれからの道を自分で見つけたことを。
だから。

「ハッピーバースデーっ」

この出会いに、祝福を。

恋人でもなく、ひよっとしたら友人でもないこの関係に、感謝し
よう。

四・パースティ〜聖譚曲（オラトリオ）・5

「駄目だったね」

「うん、駄目だったね」

ちよつと困った顔で、音亜は優亜を見る。

「自分でなんとかするって、言ったね」

「うん、言ったね」

無表情に、優亜は音亜を見ている。

「すごいね、珍しいね。二人とも、強いね」

「うん、そんな人、滅多にいないのにな」

手を繋いだまま、双子は言う。望みがあるのに、かなえてもらわなくてもいいと言った彼と彼女。どこも似ていない二人で、血のつながりもなければ友人でも恋人でもないのに、二人は同じことを言った。

『自分の身体は必要なものだからあげられない』

『望みは自分の力でかなえる』

真摯しんじに、同じことを言った。誇り高く言い切った。

「駄目だったね。欲しかったのにな」

「うん、欲しかったのにな」

迷いながらも双子の申し出を断った彼と彼女。あの二人の身体ならば双子の望みもかなったかもしれない。

でも、二人とも要らないところは無いと言ったから、双子は手を出せない。

双子が欲しいのは、他人の要らないところ。

必要ないところ。要らないところなら皆迷わずくれるから。あとで返せと言わないから。

身体を造ろう。手を離れたら死んでしまう姉妹のために。

いつからそう思っているのか双子は覚えていない。どうしてそう思うのか双子は考えたことがない。

ただ、手を離してしまえばどちらかが死ぬ。両方ではなくてどちらかが死ぬ。

どちらが死ぬのかも分からないのに、双子のどちらともがそう思っている。

ひたすらに、死んでしまいかもしれないどちらかのために、他人の身体を集めている。

集めた身体がどこにあるのか。

どうやって他人の身体で自分たちを造り出すのか。

性別から血液から、果ては老若オトコヤクまで関係なく集め続け、一体どうやって自分たちを造るのか。

「ねえ、音亜」

「なあに、おねえちゃん」

「あっち行ってみよう？」

「あっち？」

姉が指をさす。妹はそちらを見る。手を繋いだまま。

「もっと集めなきゃ。音亜が死んじゃうかもれないから」

「もっと集めなきゃね。お姉ちゃんが死んじゃうかもれないから」

双子が言いあう眼下で、笑いながら彼と彼女が歩いていく。

風が吹いた。

ふと、彼が見上げる。彼女もその視線を追ったが、すでにそこに

双子の姿はない……。

「もー別れるっ!!」

叫んだ音量に彼は顔をしかめた。

「今度こそ別れてやるっ!!」

彼女は大音声で言い切った。その腕には可愛らしい赤ちゃんが抱かれている。

「落ち着け、起きるだろ」

「ううー、別れてやるからねっ」

「はいはい、別れるのは分かったよ、子供が起きるから、落ち着け」
彼女の剣幕に、彼は苦笑する。

本当にいつまで経っても変わらない彼女だ。その点を言えば彼も
そうなのかもしれないが。

「わーかーれーてーやーるーうううう」

恨み言のように繰り返す彼女。

「分かった。別れる。おれは止めん」

うん、と頷いてやって、彼は奥に声をかけた。

「コーヒー淹れてやってくれるか？」

「今淹れてるわ」

キッチンからは彼の妻の声。長年の付き合いで、彼女の様子にも
すっかり慣れてしまっている。今更この程度ではうるたえない。

「ほんで？ 今回はなにやったんだ、旦那」

「あたしの録画してた番組を消しやがったのよ」

……彼は深々とため息をついた。それだけかと言ってやりたかつ
たが、それだけなのだろう、単純に。彼女はそういう人なのだ。

「参考までに訊くが、どんな番組？」

「この間やってた若手漫才師の特番。可愛い子いっぱい出てたのに
ーっ！ 最近の漫才師は可愛い子多いのよっ」

彼はソファの肘掛に肘をついて、半眼で彼女を眺めた。

「ほんつとうにアホ加減変わんないよなあ……よく結婚できたよ、
あんた」

「にやにおう！？ アンタこそあんなにいい嫁どこで見つけた！？
騙したんだろ？ 騙したのね騙したんだ騙されたのよ奥さんっ！」

「コラ。人の嫁まで巻き込むな」

コーヒーを運んできてくれた妻は楽しそうに笑っている。彼女と
友人奥様付き合いができる心の広い妻を、時折真剣に自慢したくな
る彼である。

「アンタにはもったいないお嫁さんよ。あたしにちょうだい。旦那

やるから交換して」

「断固拒否する」

即答する彼を、隣に座った妻は面白そうに笑っている。

「やだ、ちょうだい。二人で旅行いつてくるから、アンタは旦那とむさくるしく過ごすのよ。やーいざまーみるー」

「やらんって言ってるんだろ、アホ女。旅行いくなら嫁と二人で行くわい」

何が悲しくて男二人で寂しく待たなければならんのだ。

心底から寒い光景を打ち消しておいて、彼は彼女を見る。初めて会ったときからもうかなりの時間が過ぎて、お互い家庭を持つようになったのに、関係はまるきり変わらないのはどうということなのだろう。

彼女の旦那と彼の妻まで加わって、にぎやかなことこの上ない。もう少ししたら大きくなつた子供たちもその中に加わるはずだ。

形は変化したのに、関係は変わらない。

彼女は彼女のまま、彼は彼のまま。

そのままの、二人。

「旦那、そろそろ迎えに来るんじゃないの？」

苦笑して彼は言う。

彼女が来る先はここだと決まっているので、旦那も迷わずここに来るはずだ。

彼女はしれつと言い切った。

「あたしはいません」

「いるだろ」

「いません。妻とカケオチしましたと言っておやり」

「オイ。それ、おれの世間体を無視してるだろ」

「ヲホホホ、妻と妻に逃げられた情けない夫にしてやるー」

「いや、だから、おれの世間体」

「……あつたの？ アンタに世間体」

「帰れっ」

叫んだとき、玄関のチャイムが鳴った。きっと彼女の旦那が迎えに来たのだろう……。

恋人でなく、友人でもなかった。
家族でなく、親戚でもなかった。

ただ、一緒にいただけだ。

でも、彼女は一人の時間を忘れ、彼は息が出来るようになった。
出会った瞬間に生まれ出でた自分たちに、おめでとうと言える。
かけがえのないものを見つけた。

恋人じゃない。友人でも家族でも親戚でもない彼女と彼。
でも、大切な人。

生まれ出でた彼女と彼のオラトリオ。手助けなど要らない、望みは自分でかなえると、胸をはれる二人は、高らかなオラトリオを奏でている。

四・パースデイ〜聖譚曲（オラトリオ）・5（後書き）

四章が終了しました。ヘンな女性と振り回される少年が書きたかったのです（笑）。一章が少女同士、二章が少年同士、三章が男性と少女、なら、四章は女性と少年だな、と思ったので。そして、この章の二人は願いません。だから、名前も出ないのです。

終・いつか　いつまでも　協奏曲（コンチェルト）

ひとりの少女がいた。

少女は一人。

少女は独り。

いつもひとりでいる少女を心配して、家族は少女に人形を与えた。大きな人形。人と同じカタチ、同じくらいの大きさ。

少女は喜んだ。とても喜んだ。服を着せ、髪を梳かし、話しかけた。

家族よりも近く、人間よりも近く、人形は少女の友となった。

物言わぬ人形。語らない人形。表情のない、人形。

時が流れ、少女は大人になるうとしていた。

人形は置いていかれる。あれほど大切にしてくれた少女は、もう人形を見ない。

大人になった少女の横には大切な人が出来ていた。

家族も笑っている。幸せそうに笑っている。

少女は幸せになったのだ。

人形を置いて、行ってしまった。

置いていかれた人形は、何も語らない。硬質な顔に、表情などない。

“連れて行って、くれないの？”

少女は戻らない。人形は語らない。

そしてまた、時間が流れる。

がたん。音がして、暗かった視界に光が射した。

「わあ、大きな人形」

「おっきいねえ」

ふたつの声。同じ顔の少女たちが人形を見ている。

「かわいいね」

「かわいいねえ」

にこにここと二人は人形に語りかけた。少女が昔人形にそうしたように。

「ねえ、おかあさん、これ、ちょうだい」

「ちょうだい」

母親はにこやかにいいわよと答えた。お母さんの昔の人形だけど、欲しいのならちゃんとかわいがつてあげてねと。

母となった少女。その娘に、人形は渡された。

“連れていって、くれるの”

大きな人形。人と同じカタチ、同じくらい大きさ。

双子は喜んだ。とても喜んだ。新しい服を着せ、髪を梳かし、話しかけた。

幸せな時間が訪れた。

そうしてまた、時は流れる。

座っていた人形の、硬質な瞳に何かが映った。

寝かされている少女と泣いている少女。ちよつとだけ大きくなった二人。でもまだ大人ではない二人。

“どうしたの。泣かないで。ねえ、泣いているよ。起きて”

起き上がらない少女。泣きやまない少女。

人形は語らない。泣いていた少女はそのまま疲れて眠ってしまった。

寝ている少女は動かない。

“どうしたの。起きて”

物言わぬ人形は、悲しみの気配を感じ取っている。

“だめだよ、起きて”

ぎ。ぎぎ。人形は語らない。

ぎしぎし。人形は動く。泣き疲れて眠っている少女の頭を撫でた。

ぎしぎし。人形は動く。起きない少女の頬を撫でた。

同じ顔の二人。違うものになってしまった二人。

“どうしたの。ねえ、笑って。前のように、笑って”

話しかけておくれと、人形は思う。前のように服を着せておくれ、髪を梳かしておくれ、話しかけておくれと。

幸せな時間を頂戴、前のように。

何が足りないの。どこが足りないの。どうして動かないの。

どうすればいいの。どうしたらいいの。

何をしたら、笑ってくれる？

モウ一度、笑ッテ。

ぎし。手を繋いだ。

きつと部品が足りないの。集めないよ。

ぎしぎし。少女が目を開く。疲れて壊れた目を開く。

人形は。

「わたし、音垂
にこやかに。」

「こっちは優亜。おねえちゃんなの」

少女は笑う。

「要らないところはない？」

無表情に。

「あなたの身体で、要らないところはない？」

少女は言う。

「お礼はするよ。だから要らないところがあるのなら、頂戴」

「あなたの望むものをあげるよ。だから頂戴」

同じ顔の双子は言う。固く手を繋いだまま。

要らないところでいいの。

手を離したら死んでしまうどちらかのために、死なない身体を造るから。

あなたの身体はどこかを頂戴。

同じ顔、同じ声、同じ服、同じ身体。

双子は探し続けている。強制はしない。無理矢理に取っていくこともない。

ただ、訊く。

「ねえ、要らないところはない？」

何の疑問も持たないまま、探し続ける。

今はもう、どちらがどちらか分からない。

人形なのは音亜なのか、優亜なのか。

人間なのは音亜なのか、優亜なのか。

それともどちらも人形なのか。

それともどちらも人間なのか。

あの日少女が寝ていたベッドには何も残っていない。

あの日人形が座っていた場所にも何も残っていない。

だから何も分からない。

二人が人間なのか人形なのか。

組曲～移し身の双子～

それとも全く違う何かなのか。

離れたら死んでしまうの……。

この手を離したら、どちらかが死んでしまうの。

永遠の、コンチエルト。終わりを知らないコンチエルト。

終・いつか　いつまでも～協奏曲（コンチェルト）（後書き）

これにて『組曲～移し身の双子～』は終了です。双子の目的はひとつだけ。でもその一つをかなえることはおそらく、不可能なのです。でも、彼女らがそのことに気付くことはないのでしょうか……。長らくお付き合いありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7378c/>

組曲～移し身の双子～

2009年7月1日21時18分発行